

四番目
略三番

富士太鼓

九月

ワ子レ
キ方テ
官(富士の)
人(子)妻

ワキ同

「是の萩原の院に仕へ奉る臣下也。扱も内裏に七日の管絃の御座ゆ
 により天王寺より浅間と申樂人は是のならばなき太鼓の上手にて
 ゆを召し上せられ太鼓の役を仕ゆ處に。又住吉より富士と申樂人
 是も劣らぬ太鼓の上手にてゆが管絃の役をのぞみ罷り上りてゆ。
 此由聞召され富士浅間何れも面白き名なり。さりながら古き歌に
 信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば富士の煙のかひやなからん
 と聞時の名こそ上なき富士なりともあつばれ浅間のまさうする

(一九六)

富士太鼓

者をと勅諭ありしにより重て富士と申者もなくゆ去程に淺間此
 由を聞き憎き富士が振舞哉とてかの宿所に押よせあへなく富士
 をうつてい誠に不便の次第にてい定めて富士がゆかりのなき事
 のゆまじ若尋來りていゆば形見を遣ひさばやと存ゆ次第二ナニ雲の上
 猶遙なるく富士の行へを尋ねん 「是の津の國住吉の樂人
 富士と申人の妻や子にてい扱も内裏に七日の管絃のましますに
 より天王寺より樂人召され參る由を聞き妾が夫も太鼓の役世に
 隠れなければ望申さん其爲に都へ上りし夜の間の夢心にかゝる

月の雨 身を知る袖の涙かとあかしかれたる夜もすがら
 寝られぬまゝに思ひ立く雲井やそなた古里の跡なれや住吉

の松の隙より眺むれば月落かゝる山城もはや近づけば笠をぬぎ
 八幡に祈り掛帯の結ぶ契りの夢ならで現に逢ふや男山都にはや
 く着にけりく 「急ぎゆ程に都に着てい此所にて富士の御

行衛を尋ねばやと存ゆいかに案内申ひく 「是の富士がゆかりの
 者にてい富士に引合せられて給ひゆへく 「富士がゆかりと申
 の何くにあるぞ 「是にゆ 「扱是の富士が爲何にてあるぞ

富士太鼓

女

「恥かしながら妻や子にてひ　「のう富士の討れてひよ　「何と

富士の討れたるとひや　「中くの事富士の浅間に討れてひ

「さればこそ思ひ合せし夢の占重ねて問ば中々に浅間にうたれ情なく　さしも名高き富士のなと煙とゆなりぬらん今の歎くに其かひもなき跡に残る思ひ子を見るからにいと猶すゝむ涙のせきあへず　「今の歎てもかひなき事にてあるぞ是こそ富士が舞

の装束ひよ夫人の歎きにの形見に過たる事あらじ是を見て心を

慰めひへ　「今迄の行衛も知らぬ都人の妻を田舎の者と思召し

て偽り給ふと思ひしに誠に知るき鳥甲月日も變らぬ狩衣の疑ふ所もあらばこそ痛ゆしやかの人出で給ひし時みづから申やう天王寺の樂人の召にて上りたり御身の勅詔なきに押て參れば下として上を計るに似たるべし其上御身の當社地給の樂人にて明神に仕へ申上の何の望の有べきぞと申しを知らぬ顔にて出給ひし其面影の身にそへど眞の主のなきあとの忘れ形見をよしなきか　「かててよりかくあるべきと思ひなば　「しうこうが手を出し　「はんろうが涙にても止むべきものを今更に神ならぬ身を恨みか

富士太鼓

こち歎くぞ哀なる歎くぞ哀なりける物事「あら恨めしやいかに姫

あれに夫の敵のひぞやいざ討たふ
「あれの太鼓にてこそいへ
思ひの餘りに御心亂れすぢなき事を仰せいぞやあら淺ましやい

「うたての人のいひ言やあかて別れし我夫の失にし事も太鼓ゆへ
只恨めしきの太鼓なり夫の敵よいざ討とう
「げに理りなり父

御前に別れし事も太鼓故さらば親の敵ぞかし討て恨みを晴す
べし
「妾がために夫の敵いざやねらぬ諸共に
「男の姿

狩衣に物の具なれや鳥甲
「恨みの敵討をさめ
「鼓を苔に

「埋まんとて
「よするや関の聲たて、秋の風よりすさましや

「うてやくと攻鼓
「あらさてこりの泣音やな打上猶も思へば
腹たちやぐげしたる姿に引かへて心言葉も及ばれぬ富士が
幽霊來ると見えてよしなの恨みやもどかしと太鼓うちたるや

持たる撥をば劔と定め
「噴志の焰の太鼓の烽火の天にあが
れば雲の上人誠の富士嵐に絶ずもまれて裾野の櫻四方へげつと
散かと見えて花衣さす手も引手も伶人の舞なれば太鼓の役の本
より聞ゆる名の下空からす類ひなやなつかしや
げにや女人

富士太鼓

の悪心の煩惱の雲晴れて五常樂を打給へ
 「脩羅の太鼓の打止ぬ此君の御命千秋樂と打うよ」
 「扱又千代や萬代と民も榮て安穩に」
 「太平樂を打うよ」日も既に傾きぬ
 山の端を眺やりて招き返す舞の手の嬉しや今こそ思ふ敵の打たれ打れて音をや出すらん我にの晴る胸の煙富士が恨を晴せば涙こそ上なかりけれ
 是迄也や人々よ
 暇申てさらばと伶人の姿鳥甲皆ぬき捨て我心亂れ笠亂れ髪かゝる思ひの忘じと又立返り太鼓こそ憂人の形見也けれと見置てぞ歸りける跡見置てぞ歸りける

五番目 略脇能

皇

帝

三月

前シテ老後シテ
ワキキ 玄宗皇帝

後シテ
ワキツレ大

臣神履

「春の春遊に入て夜の夜を専とし後宮の佳麗三千人三千の寵愛一
 身にありかく類ひなき貴妃の紅色芙蓉の紅色かへて未央の柳
 の力もなし たゞ弱々とふし柴の露の命もいかならん」
 心づくしの春の夜の
 木の間月も朧にて雲井に歸る雁がね
 もわが如くにや鳴渡る霞のうちのかは櫻ひとへにおしき姿かな
 「いかに奏聞申へき事のゆ
 「ふしぎやな宮中静まり
 物さびて心をすまます折節に御階の下に來るを見ればさもふしぎ

の眠れる花の如くなり。然るに明皇榮華を極め世をたもち色
 を重んじ給ふ故類ひなき貴妃にかく契りをこめて年月の春宵短
 きを苦しみて日高くおきいて朝まつりことも絶々に移る方なき
 中なれど小説「のがれ難しや世の中。思ひぬ障り有明の月の都
 の舞樂まで學び残せる方もなく秘曲つたへし笛竹のことぶきな
 れやこの契り天長く地久しくてつくる時もあるまじ。」げに今
 思ひ出したり。かの老人の教の如く明王鏡を取出だし。かの御枕に
 おくべきなり大臣上「勅諭もつとも然るべし」と月卿雲客一同に明王

鏡を取出だし御枕近き御几帳にたて添へてこそおきたりけれ。
 かくて暮ゆく雲の足上たよふ風も冷しく身の毛もよだつ
 折節にふしぎや鏡の其うちに鬼神の姿ぞうつりける同上九華の
 帳を押のけて打上かの御枕によりたけの笛をおつとりさしあ
 げて勇み喜ぶ其氣色鏡にうつり見えければ帝は是を勸覽あつて。
 扱の病鬼よのがさじと劔を抜いて立給へば天にあがり地に又下
 り飛行自在を顯して帝に向ひ怒をなせば劔をふりあげきり給へ
 ば御殿の柱に立かくれて姿も見えず失にけり三「ふしぎや曇る

二番目

通

盛

七月

前シテ
ワケ
ツレテ
僧老

女

後シテ
小
相

ワケ

「是の阿波の鳴門に一夏を送る僧にてひ。扱も此浦の平家の一門果
 て給ひたる所なれば痛のしく存じ毎夜此磯邊に出て御經をよみ
 奉ひ。唯今も出て弔ひ申さばやと思ひひワケ上磯山に暫し岩根のま
 つ程にワケ下たが夜舟との白波に楫音ばかり鳴門の浦静なる今
 宵かなワケ下「すの遠山寺の鐘の聲此磯近く聞えひ 入相
 こさめれいそが給へ 程なく暮る、日の數かな 昨日すぎ
 げふとくれ 明日またかくこそあるべけれ され共老に頼

(七〇七)

まぬゆ 身ミの行末ヨの日數ヒなり 一ヒつまで世セをばわたづ海の
 あまりに隙ヒも浪ナミ小舟 何ナニを頼タみに老オシの身の 命イのためにつ
 かふべき うえきながら心ココロの少し慰なぐさむゆ 月の出汐ウツシの海士
 小舟コボネさも面白オモシき浦ウラの秋アキの氣色キシキかな所ところの夕波ユフナミの鳴門ナリノの沖ナミに雲クモつ
 く淡路ワタジの島シマや離はなれえぬ浮世ウキヨのわざを悲かなしき 暗濤クワンタウ月ツキを
 埋うんで清光セイコウなし 舟フネに焚海士ヒキウシの篝火カウキ更過さらぎて 苦くるよりくゆる
 夜ヨの雨アメの芦間アシマに通とほふ風カゼならての音ネするものも波枕ナミマに夢ゆめか現まかお
 經ネの聲コエの嵐ハルカにつれて聞きゆるぞや楫音カヌエを静しずめからるを抑おさへて聽聞キコ

せばやと思おもひゆ 一ヒたそや此鳴門ココノナリノの沖ナミに音ネするゆ 泊定トドメめぬ
 海士ウミシの釣舟ツリフネひよ 一ヒさもあらば思おもふ仔細ササあり此磯ココノイソ近くよせ給たまへ
 仰あやせに隨まひさしよせ見みれば 二人フタヒトの僧ソウの巖イワの上ウヘ 漁イシの舟フネの
 岸キの陰カゲ 一ヒ昔火サキの陰カゲを假初カゲにお經ネを開ひらき讀よ誦みする 有難ありがたや漁イシ
 するわざの蘆火アシヒと思おもひしに 一ヒよき燈火トウカに 鳴門ナリノの海ウミの
 弘誓コウゼイ深如シカク海曆カイリキ切きふしぎの機縁キゼンによりて五十展轉イソジツテンの隨喜ズイキ功德クツドク品ヒン
 げに有難ありがたや此經ココノキヤウのおもてぞ暗くらき浦風ウラカゼも蘆火アシヒの陰カゲを吹立フキタて聽聞キコす
 龍女リウメ變成ヘンニヤルと聞きく時トキゆ 祖母ソボも頼たもしや祖父ソボ

通 盛

ぬいふに及ばず願ひも三つの車の蘆火の清くあかすべし猶々お
經遊ばせナオナオ　　ワキ　「あら嬉しやひ火の光にて心靜かに御經をよ

み奉りてひ先々此浦の平家の一門はて給ひたる所なれば毎夜此
磯邊に出御經をよみ奉りひとりわきいかなる人此浦にてはて

給ひてひぞ委しく御物語りひへ　「仰のごとく或のうたれ又の

海にも沈み給ひてひ中にも小宰相の局こそや諸共に御物語りへ

「さる程に平家の一門馬上をあらため海士の小舟に乘移り月に棹

さす時もあり　「爰だにも都の遠き須磨の浦　思ひぬ敵におと

されてげに名を惜む武士のおのころ鳥や淡路がた阿波の鳴門に

着にけり　「さる程に小宰相の局乳母を近づけ　いかに何とか

思ふ我頼もしき人々何都にとまり通盛のうたれぬ誰を頼みて

ながらふべき此海に沈まんとて主従泣くく手を取り組み舟端

にのぞみ　「さるにてもあの海にこそ沈まうずらめ　沈むべ

き身の心にや涙のかねて浮むらん　西のと問へば月の入る

其方も見えず大方の春の夜や霞むらん涙も共に曇らん

乳母泣くく取付きて此時の物思ひ君一人に限らず思召しとま

道

三

一、人、も、洩、さ、じ、の、方、便、品、を、讀、誦、す、る、
 一、如、我、昔、所、願、
 一、今、
 者、已、滿、足、
 一、化、一、切、衆、生、
 一、皆、令、入、佛、道、の、
 一、通、盛、夫、婦、お、經、に、
 引、か、れ、て、立、歸、る、浪、の、
 一、あ、ら、有、難、の、御、法、や、な、打、上、
 一、ふ、し、ぎ、や、な、さ、
 一、も、艶、め、け、る、御、姿、の、波、に、浮、か、み、て、見、え、給、ふ、
 一、い、か、な、る、人、に、て、ま、し、
 一、ま、す、ぞ、
 一、名、ば、か、り、の、ま、だ、消、果、て、ぬ、
 一、あ、だ、波、の、阿、波、の、鳴、門、に、沈、み、
 一、は、て、し、小、宰、相、の、局、の、幽、靈、な、り、
 一、今、一、人、の、甲、冑、を、帶、し、兵、具、い、み、

一、じ、く、み、え、給、ふ、
 一、い、か、な、る、人、に、て、ま、し、ま、す、ぞ、
 一、是、の、生、田、の、森、の、
 一、合、戦、に、お、い、て、名、を、天、下、に、あ、げ、武、將、た、つ、し、
 一、譽、を、越、前、の、三、位、通、盛、昔、
 一、を、語、ら、ん、其、爲、に、是、迄、顯、れ、出、た、る、な、り、
 一、抑、も、此、一、谷、と、申、す、に、前、
 一、の、海、上、の、嶮、し、き、
 一、鴨、越、誠、に、鳥、な、ら、で、
 一、か、け、り、難、く、
 一、獸、も、足、を、立、つ、べ、
 一、き、地、に、あ、ら、ず、
 一、唯、幾、度、も、大、手、の、陣、を、心、も、と、な、き、ぞ、と、て、
 一、宗、徒、
 一、の、一、門、さ、し、つ、か、
 一、の、さ、る、通、盛、も、其、隨、一、た、り、し、
 一、が、忍、ん、て、我、陣、に、歸、り、
 一、小、宰、相、の、局、に、向、ひ、
 一、既、に、軍、明、日、に、き、
 一、の、ま、り、ぬ、痛、
 一、の、し、や、御、身、
 一、通、盛、な、ら、で、此、
 一、う、ち、に、頼、む、
 一、べ、き、人、な、し、
 一、我、と、も、か、く、も、
 一、な、る、な、ら、ば、都、

に歸り忘れずのなき跡弔ひてたび給へ名殘惜みのお盃通盛酌
 を取さす盃の宵の間もうたねなりし睦言のたとへば唐土の項
 羽高祖の攻めをうけ數行虞氏が涙も是にゆいかてまさるべき燭
 暗うして月の光にさし向ひ語り慰む處に「舍弟の能登守は
 や甲冑をよるひつゝ通盛のいづくにぞなど遅なかり給ふぞとよ
 ばかりし其聲のあら恥かしや能登守わが弟といひながら他人よ
 り猶恥かしや暇申てさらばとて行もゆかれぬ一谷の所から須磨
 の山の後髪ぞひかるゝ」さる程に合戦も半なりしかば但馬守

シテ中
 天晴通
 盛仕舞
 盛し通
 終り

經政もはやうたれぬと聞ゆ 一さて薩摩守忠度のはてゆいかに

「岡部の六彌太忠澄と組んで討たれしかば天晴通盛も名ある侍も
 かな討死せんと待所にすゆあれを見よ好き敵に 近江の國の住
 人に」木村の源五重章が鞭を上て驅來る通盛少しも騒がず
 拔設けたる太刀なれば甲の眞向ちようと打返す太刀にてさし違
 へ共に修羅道の苦を受くる憐みをたれ給ひよく弔ひてたび給へ
 讀誦の聲を聞く時ゆゝ悪鬼心を和らげ忍辱慈悲の姿にて菩
 薩も爰に來迎す成佛得脱の身となりゆくぞ有難き

キリ中

四番目
略三番

櫻

川

三月

シテ狂女
ツレ人商人

子方櫻
ツワレキ里

子(諸なし)
人

男

(七一七)

「斯様にゆ者、東國方の人商人にてゆ。我久しく都にゆひしが、此度の筑紫日向に罷下りてゆ。又昨日の暮程に幼き人を買取りてゆ。彼人申されゆ。此文と身の代とを、櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて、慥に届けよと仰せゆ程に、唯今櫻子の母の方へと急ぎゆ。此あたりにてありげにゆ。先々案内を申さばやと存ゆ。いかに案内申ゆ。櫻子の母の渡りゆか。誰にて渡りゆぞ。さんゆ。櫻子の御方より御文のゆ。又此代物を慥に届け申せと仰ゆ程に、是迄持て参り

てい。かまへて慥に届け申すにてい。女
 「あら思ひよらずや先々文
 を見うするにてい。儲もく。此年月の御有様見るも餘りの悲しさ
 一人一詞に人商人に身を賣て東の方へ下い。のう其子の賣るまじき子にて
 いものをや。あら悲しや早今の人も行き方知らず成てい。いかに。
 是を出離の縁として御様をもかへ給ふべし。唯返すぐも御名残
 こそ惜ういへ。同下。名残惜くの何しにか添いで母に別るらん。
 獨伏屋の草の戸のく。明し暮して憂き時も子を見ればこそ慰
 むにさりとの我が頼む神も木華開耶姫の御氏子なるものを櫻

子留めてたび給へさなきたに住みうかれたる古里の今の何にか
 明暮を堪へて住むべき身ならねば我子の行へ尋ねんと泣くく
 迷ひ出て行くく。大第。頃待ちえたる櫻狩。山路の春に急
 がん。是の常陸の國磯邊寺の住僧にてい。又是に渡りい。幼き人
 の。いつく共知らず愚僧を頼む由仰せい。程に師弟の契約をなし申
 てい。又此あたりに櫻川とて花の名所のい。今を盛の由申い。程に幼
 き人を伴ひ。唯今櫻川へと急ぎい。筑波山この面かの面の花盛
 雲の林の影茂き緑の空もうつろふや松の葉色も春めきて。

櫻川

二

嵐も浮む花の波櫻川にも着にけりく
「いかに申し何とて

遅く御出でひぞ待ち申てひ
「さんひ皆々御供申し程に扱遅な

かりてひあら見事やひ花の今を盛と見えてひ
「中々の事花の

今が盛にてひ又爰に面白き事のひ女物狂のひが美しき掬ひ網を

持て櫻川に流る、花を掬ひひがけしからず面白う狂ひひ是に暫

く御座ひひて此物狂を幼き人にも見せ参せられひへ
「さらば

其物狂を此方へめされひへ
「心得申しやあく彼物狂にいつ

もの如く掬ひ網を持て此方へ來れと申しへ
「いかにあれなる

道行き人櫻川に花の散りひか何散り方に成たるとや悲やな

なきだに、行く事やすき春の水の流る、花をや誘ふらん花散れる

水のまにくとめくれば山にも春のなく成にけりと聞時の少し

なり共休らぬば花にや疎く雪の色櫻花櫻花散りにし風の名残

にひ
「水なき空に波ぞ立つ
「思ひも深き花の雪
「散るひ

涙の川やらん打上是に出でたる物狂の故郷の筑紫日向のものさ

も思ひ子を失ひて思亂る、心筑紫の海山越て箱崎の波立ち出て

須磨の浦又の駿河の海過ぎて常陸とかや迄下り來ぬげにや親子

の道ならずの遙とほき旅をいかにせん爰こゝに又名なづなに流れたる櫻川うづもがはとてさも面白おもしろき名所なごころあり別わかれし子の名も櫻子うづもぎなればかたみといひ折柄せりかたといひ名も懐なつかしき櫻川うづもがはに 散ちり浮うく花はなの雪ゆきを汲くみみて自ら花衣はなころもの春はるのかたみ残のこさん 花鳥はなとりの立別たてわかれつゝ親おやと子のく行ゆへも知らで天あまさかる鄙はなの長路ながぢに衰おとろへばたとひ逢あふ共親ともおやと子の面忘おもれせばいかならんうたてや暫しばしこそ冬ふゆこもりして見えずとも今いまの春はるべなるものを我われ子の花はななど咲さぬく 「此物このもの狂くるの事ことにてありげにひ立たち寄よりて尋たずねばやと思おもひいかに是こゝなる狂女くるめおこ

との國里くにの何所どこの人ぞ 「是こゝの遙とほの筑紫ちくしの者ものにてい 「夫おとこの何とて斯か様に狂亂きやうらんとの成なりたるぞ 「さんさんひ唯一ひとり人ひとある忘形わすれがた見みの縁子ゆかりに生なて離はなてひ程ほどに思おもひが亂みだりてい 「あら痛いたいしやい又見申またみまをせば美うつくしき掬くひ網あみをもち流ながるゝ花はなを掬くひあまつさへ渴仰かつおほの氣色きしよ見え給たまひてい何と申まをたる事ことにていぞ 「さんさんひ我故郷われふるさとの御神みかみをば。木華きは開耶ひら姫ひめと申まをて御神みかみ躰みだの櫻木うづもぎにて御入みまひされば別わかれし我子われこも其その御氏みぢ子こなれば櫻子うづもぎと名付なづけ育そだしかば神かみの御名みかみも開耶ひら姫ひめ尋たずぬる子この名なも櫻子うづもぎにて又此川またこのがはも櫻川うづもがはの名なも懐なつかしき花はなの散ちを仇かたにもせし

「上」
と思ふなり 謂を聞けば面白やげに何事も縁ありけりさば
かり遠き筑紫より此東路の櫻川迄下り給ふも縁よのう
「先此」

川の名に負ふ事遠きにつきての名譽あり彼貫之が歌のいかに

「げに」
昔の貫之も遙き花の都より 「未見もせぬ常陸の國に

「名も櫻川」 「有と聞て」 *常よりも春べになれば櫻川く波

の花こそ間なく寄すらめと詠みたれば花の雪も貫之も古き名の

み残る世の櫻川瀬々の白浪茂ければ霞う流すしだの浮島の浮か

め浮かめ水の花げに面白き河瀬かなく
「いかに申し此物

狂の面白う狂ふと仰せゆがけふ何とて狂ひゆぬぞ 「さん

ひ狂のする様がひ櫻川に花の散ると申しへば狂ひ程に狂のせ

て御目に懸うするにてひ 「急で御狂のせゆへ 「心得申しあ

ら笑止や俄に山嵐のして櫻川に花の散りゆよ 「よしなき事を

夕山風の奥なる花を誘ふごさめれ流れぬ先に花掬ゆん 「げに

く見れば山嵐の木々の梢に吹落ちて 「花の水層の白妙の

「波か」と見ば上より散る 「櫻か」 「雪か」 「波か」 「花か」と

「浮き立つ雲の」 「河風に」 散ればぞ波も櫻川く流る花を

櫻川

五

掬ゆん 花の下に歸ん事を忘れ水の 雪を受たる花の袖

夫水流花落て春とこしなへにあり 月冷しく風高うして鶴か

岸花紅に水を照し洞樹翠に風を含む山花開けて錦に

似たり澗水湛へて藍の如し 面白や思ひず爰に浮れ来て名も

懐しみ櫻川の一樹の陰一河の流汲みて知る名も所からあひにあ

ひなば櫻子の是又他生の縁なるべし げにや年を経て花の鏡

となる水の散りかゝるをや曇るといふらん眞散りぬれば後の芥

になる花と思ひ知る身も扱いかに我も夢なるを花のみと見るぞ

し裳裾をしほらかして花に寄邊の水せき留て櫻川になさうよ

の御神木の花なれば風もよぎて吹き水も影を濁すなと袂をひた

て浮浪の花の柵かけまくもかたじけなしや是とても木華開耶姫

帯のかごとばかりに散る花を仇になさじと水をせき雪をたへ

櫻川

六

四番目

山

姥

シテ山 姥 ワキ従 者
ツレ 遊女山姥 後シテ 鬼 女

大第 ヲヨクキ 善き光ぞと影頼むく佛の御寺尋ねん 是の都方に住居仕

る者にてけ。又是に渡りけ御事のひやくま山姥とて隠れなき遊女

にて御座け斯様に御名を申す謂の山姥の山廻りするといふ事を。

曲舞に作つて御謠ひ有により京童の申慣のしてけ。又此頃の善光

寺へ御参り有度き由承け程に某御供申し唯今信濃の國善光寺へ

と急ぎけ 都を出てさ、波や志賀の浦船漕がれ行く末の有乳

の山越えて袖に露散る玉江の橋かけて末ある越路の旅思ひやる

(一三七) はささ波の古名

山姥

一節との御所望ひぞ

シテ

「いや何をか包み給ふらんあれにましま

す御事のひやくま山姥とて隠れなき遊女にてゆましまさずや先

此歌の次第とやらんによし足引の山姥が山廻りすると作られた
何中スソニニニニ

りあら面白やひ是の曲舞によりての異名扱眞の山姥をばいかな

ワキ

る者とか知ろし召されてひぞ 「山姥との山に住む鬼女とこそ

曲舞にも見えてひへ

シテ

「鬼女との女の鬼とやよし鬼なり共人な

り共山に住む女ならば妾が身の上にてゆさむらゆすや年頃色に

何出させ給ふ言の葉草の露程も御心への懸給ゆぬ恨申しに來た

り道を極め名を立て世情萬徳の妙花を開く事此一曲の故ならず
や然らば妾が身をも弔ひ舞歌音楽の妙音の聲佛事をもなし給ゆ
ばなどか妾も輪廻を遁れ歸性の善所に至らざらんと 恨を夕
山の鳥獸も鳴き添へて聲をあげるの山姥が靈鬼是迄來りたり
「ふしぎの事を聞くものかな扱眞の山姥の是迄來り給へるか

シテ

「我國々の山廻けふしも爰に來る事の我名の徳を聞かん爲也謠ひ

給ひて去とての我妄執を晴し給へ 「此上の兎角辭しなば恐し

や若身の爲や悪かりなんと憚り乍ら時の調子をとるや拍子を進

(八三七)

山 髪にゆおどろの雪を戴き 眼の光の星の如し 扱面の色の

沙井登 かにぬりの 軒の瓦の鬼の形を 「こよひ始めて見る事を

何にたとへん 古への 鬼一口の雨の夜に 神鳴り騒

ぎ恐ろしき其夜を思ひ白玉か何ぞと問ひし人迄も我身の上にな

りぬべき浮世語も恥かしゃ 春の夜の一時を千金に替

へじとの花に清香月に影是の願ひのたまさかに行逢ふ人の一曲

の其程もあたら夜に早々謠ひ給ふべし げに此上の兎も角も

いふに及ばぬ山中に 一聲の山鳥羽をたたく 鼓の瀧波

シテ中 「袖の白妙 雪を廻す木の花の 何の事が 法ならぬ

よし足引の山姥が 山廻りするぞ苦しき 夫山といつば

塵土より起つて天雲かゝる千丈の峯海の苔の露より滴りて波濤

を疊む萬水たり 一洞空しき谷の聲梢に響く山彦の無聲音を

聞きたよりとなり聲に響かぬ谷もがなと望しもげにかくやらん

「ことに我住む山家の氣色山高うして海近く谷深うして水遠し

前にの海水濼々として月真如の光をかゝげ後にの嶺松巍々とし

て風常樂の夢を破る 刑鞭蒲朽ちて螢空く去る諫鼓苔深うし

(九三七)

山 結

五

立通シテ下「一樹の蔭一河の流皆是他生の縁ぞかしましてや我名を夕月の浮世を廻る一節も狂言綺語の道直に讚佛乗の因ぞかしあら御名残惜しや下カ」ノル暇申て歸る山の地ニ入「春の梢に咲かと待し」シテス「花を尋ねて山廻り」地ニ入「秋のさやけき影を尋ねて」シテニ「月見る方にと山廻り」地ニ入「冬の冴行く時雨の雲の」シテス「雪を誘ひて山廻り」地ニ入廻りくして輪廻を離れぬ妄執の雲の塵積つて山姥となれる鬼女が有様見るやくと峯に翔り谷に響て今迄爰にあるよと見えしが山又山に山廻り山又山に山廻りして行へも知らず成にけり

扇能 氷 室 三月 前シテ 後シテ 水室の神 男 女 天 下

大常 八洲も同じ大君の御影の春ぞ長閑けき 抑々是の龜山

の院に仕へ奉る臣下也我此度丹後の國九世の戸に参り既に下向道なれば是より若狹路にかり津田の入江青羽後瀬の山々をも一見し夫より都に歸らばやと存ひ 花の名の白玉椿八千代經て 緑にかへる空なれや春の後瀬の山續く青羽の木蔭分け過ぎて雲路の末の程もなく都に近き丹波路や氷室山にも着にけり 急ぎひ程に丹波の國氷室山に着てひ此所の人を待

ち。氷室の謂をも委しく尋ねばやと存ツシレテ氷室守春も末なる山
 陰や花の雪をも集むらん 深谷ツレヒに立る松陰や冬の氣色を残す
 らん打上「夫一花開けぬれば天下の皆春なれ共松の常磐の色添へ
 て緑に續く氷室山の谷風のまた音さえて氷に残る水音の雨も静
 に雪落ちてげに豊年を見する御代の御調の道もすぐなるべし。
 下歌 國土豊かに榮ゆくや千年の山も近かりきワキ 變らぬや氷室の山
 の深緑 春の氣色の有り乍ら此谷陰の去年の儘深冬の雪を
 集め置き霜の翁の年々に氷室の御調守るなりワキ 「いかに

是なる老人に尋ねべき事のシテい 「こなたの事にてい何か何事を御
 尋ねいぞワキ 「おこと此氷室守にてあるかシテ 「さんい氷室守に
 ていワキ 「扱も年々に捧ぐる氷の物の供御拜みの奉れ共在所を見
 る事の今始め也扱シテいかなる構へにより春夏迄氷の消えざる謂
 委しく申いへシテ 「昔御狩の荒野に一村の森の下庵ありしに頃
 水無月半なるに寒風御衣の袂にうつりてさながら冬野の御幸の
 如し怪み給ひ御覽すれば一人の老翁雪氷を屋の内にたへたり。
 彼翁申す様夫仙家水に紫雪紅雪とて薬の雪あり翁も斯くの如し

とて氷を供御に供へしより氷の物の供御始りてい ワキ 謂を聞け

ば面白や扱々氷室の在所く上代よりも國々にあまたかひりて

ありしよのり シテ 先の仁徳天皇の御宇に大和の國鬪鷄の氷室よ

り供へ初めにし氷の物なり ツレ 又其後の山陰の雪も霰もさえ續

くたよりの風を松が崎 シテ 北山陰も氷室なりしを ツレ 又此國に

所を移して深谷もさえけく谷風寒氣も シテ 便りありとて今迄も

未代長久の氷の供御の爲丹波の國桑田の郡に氷室を定め申なり

げにぐ翁の申す如く山も所も木深き蔭の日影もさぬ深谷な

れば春夏迄も雪氷の消ぬも又の理なり シテ 一いや所によりて氷の

消えぬと承るゆ君の威光も無に似たり コキ 唯世の常の雪氷の

一夜の間にも年越ゆれば ワキ 春立つ風に消るものを シテ され

ば歌にも ワキ 貫之が 上歌 袖ひちて結びし水の氷れるを シテ 春

立つけふの風やとくらんと詠たれば夜の間に来る春にだに氷の

消ゆる習ひなりましてや春過ぎ夏たけて早水無月になる迄も消

えぬ雪の薄氷供御の力に有でゆいかでか残る雪ならん シテ *

夫天地人の三才にも君を以て主とし山海萬物の出生即ち王地の

(七四) 七打カケ

水 室

三

(八四七)
終り迄

恩徳なり 皇圖長く堅く帝道遙に盛なり 佛日光ますく

にして法輪常に轉ぜり 「陽徳をりを違へずして雨露霜雪の時
を得たり 夏の日になる迄消えぬ冬氷春立つ風やよぎて吹く
らんげに妙なれや萬物時に有り乍ら君の惠の色添へて都の外
北山につぐや葉山の枝茂み此面彼面の下水にあつむる雪の氷室
山土も木も大君の御影にいかで洩るべきげに我乍ら身の業の浮
世の數に有り乍ら御調にも取り別きて猶天照らす氷の物や他に
も異なる捧げ物敬感もつて甚しき玉體を拜するも深雪を運ぶ故

(九四七)

とかや 「然れば年立つ初春の初子のけふの玉箒手にとるから
にゆらぐ玉の翁さびたる山陰の去年の儘にて降り續く雪のしづ
りをかき集めて木の下水にかき入れて氷を重れ雪を積みて待ち
居れば春過ぎて早夏山になりぬればいと氷室のかまへして立
去る事も夏陰の水にもすめる氷室守夏衣なれ共袖さゆる氣色な
りけり げに妙なりや氷の物の 御調の道も直にある都
にいざや歸らん 「暫く待たせ給ふべしととも山路のおついで
に今宵の氷の御調供ふる祭御覽せよ 「そもや氷調の祭とぬい

水・氷・雪

地上

四

かなる事にあるやらん
 「人こそしらぬ此山の山神木神の水室
 を守護し奉り毎夜に神事あるなりといひもあへねば山暮れて寒
 風松聲に聲立て時ならぬ雪の降り落ち山河草木おしなめて氷を
 敷きて瑠璃壇になると思へば氷室守の薄氷を踏むと見えて室の
 内に入りにつけり氷室の内に入りにつけり
 「樂に引かれて古鳥蘇
 の舞の袖こそゆるぐなれ
 「變らぬや氷室の山のふかみどり
 「雪を廻らす舞の袖かな
 「曇なき御代の光も天照す氷室の御調
 供ふ也打上「供へよやくもいさぎよき水底の砂」長じて

の又巖の陰より打上山河も震動し天地も動きて寒風頻に肝をつ
 りめて紅蓮大紅蓮の水を戴く氷室の神體冴輝きてぞ現れたる
 「谷風水邊冴氷りて
 「月も輝く氷の面
 「萬境を映す鏡
 の如く「晴嵐こずゑを吹拂つて
 「影も木深き谷の戸に
 「雪のしぶき
 霰の横ざりて岩もる水もさざれ石の深井の水に
 閉つけらるゝを引放し
 浮かみ出でたる氷室の神風あら寒
 や冷やかや「畏き君の御調なれや
 波を収むるも氷水を
 静むるも氷の日に添月に行き年を待ちたる氷の物の供へ供へ給

へや供へ給へと采女の舞の雪を廻らす小忌衣の袂に添へて薄氷
 を砕くなく解かすなくと氷室の神の氷を守護し日影を
 隔て寒水をそそぎ清風を吹かして花の都へ雪を分け雲を凌ぎて
 北山のすゆや都も見えたりく急げや急げ氷の物を供ふる所も
 愛宕の郡捧ぐる供御も日の本の君に御調物こそめでたけれ*

花の都
 小忌衣
 より

善

界

八月

ワツシ
 キレチ
 比叡山
 坊

雲路を凌ぐ旅の空く出づる日の本を尋ねん 是の大唐の

天狗の首領善界坊にてひ扱も我國に於て育王山青龍寺般若臺に
 至る迄少しも慢心の輩をば皆我道に誘引せずと云ふ事なし真や

日本の粟散遍地の小國なれ共神國として佛法今に盛なる由承り

及ひ間急ぎ日本に渡り佛法をも妨げばやと存ひ 名にし負ふ

豊蘆原の國の神く青海原にさしおるす天の瓊矛の露なれや

秋津洲根の朝ぼらけそなたもしるく浮かむ日の神の御國の是か

善
 界

とよく
 急ぎゆ程に。是の早日本の地に着てゆ。先承り及び
 たる愛宕山に立ち越え。太郎坊に案内を申さばやと存ゆ。是の早愛
 宕山にてありげにゆ。山の姿木の木立是こそ我等が住むべき所に
 てゆへいかに案内申ゆ。誰にて渡りゆぞ。是の大唐の天狗
 の首領善界坊にてゆが。御目に懸り申し談すべき仔細のゆひて。是
 迄遙々参りてゆ。一偕の承り及びたる善界坊にて渡りゆか先某
 が庵室へ御入りゆへ。扱唯今の爲に御出にてゆぞ。一さんゆ
 唯今参る事餘の儀にあらず。我國に於て育王山青龍寺般若臺に至

る迄。少しも慢心の輩をば。皆我道に誘引せずといふ事なし。眞や。日
 本の小國なれ共。神國として。佛法今に盛んなる由承りゆ。間少し心
 に懸り遙々是迄参りてゆ。同じく御心を一つにして。自他の本意
 を達し給へ。一偕ゆやさしくも思し召し立ちゆもの哉。夫我國の
 天地開闢より此方先以つて神國たり。されば佛法今に盛んなり先
 々間近き比叡山あれこそ日本の天台山ゆよ。心の儘に窺ひ給へ
 「扱ゆいよく便りあり。それ天台の佛法の權實二教に分ち。又
 密宗の奥義を傳へ。一顯密兼學の所なるを。我等如きの類と

して「たやすく窺ひ」給ふん事 同上 蠅螂が斧とかや猿猴が
 月に相同じかくの知れ共さすが猶我慢増上慢心の便りを得んと
 思ふにも大聖の威力をいよく案じ連ねたり 夫明王の誓約
 まちくになりといへ共其利益餘尊に超え正しく火生三昧に入給
 ひて一切の魔軍を焚焼せり 外に忿怒の相を現すといへ共
 内心慈悲の御惠疑念不動の理を現し但住衆生心想之中げに有
 難き悲願かな 然りとついで共輪廻の道を去やらで魔境に沈
 む其歎き思ひ知らずや我乍ら過去遠々の間にさすが見佛聞法の

終り迄

同

其結縁の功により三惡道を出て乍ら猶も鬼畜の身をかりていと
 佛敵法敵となれる悲しさよ今此事を歎かずの未來永々を経る
 とていつか般若の智水を得て火生三昧の焰を遁ればつべき
 「世の中の夢が現か現共夢共いさや白雲のかゝる迷ひを翻へし歸
 服せんと思ひずしていよく我慢の旗矛の靡きもやらで徒に
 行者の床を窺ひて降魔の利劔を待つこそはかなかりけれ 太羅ヒス
 ての時刻移なんいざ諸共に立出て比叡の山邊のしるべせん
 「法のため今ぞ愛宕の山の名に頼みを懸て思ひ立つ雲の掛橋うち

上テ

渡り 地上ニ「我名やよそに高雄山東を見れば大比叡や」横川の杉
 の梢より 「南に續く如意が嶽鷲のお山の雲や霞も嵐と共に失
 せにけり」勅を受け我立つ柵を出て乍ら急ぐも同じ名
 に高さ大内山の道ならん かくてやうく大比叡を下りつゝ
 行けばふしぎやなあれに見えたるさがり松の 梢の嵐吹きし
 をりく 雲となり雨となる山河草木震動し天に輝く電光大地
 に響く雷の肝魂を暗まかすこの抑何の故やらん 大嶽抑々
 是の大唐の天狗の首領善界坊とゆ我事なりあら物々しやいかに

御坊今更何の觀念をかなせる 夫若作障碍即有一佛魔境と説けり
 あら痛のしや欲界の内に生る 輩の 悟の道や其儘に魔道の
 巷となりぬらん 打上ふしぎや雲の中よりも 邪法を唱ふる
 聲すなり本より魔佛一如にして凡聖不二也自性清淨天然動きな
 き是を不動と名づけたり 「聽我説者得大智慧畔多羅吒干滿
 其時御聲の下よりも 明王現れ出で給へば矜迦羅制多伽十
 二天各々降魔の力を合せて御先を拂つておゆします 明王諸
 天ゆさて置きぬ 東風吹く風に東を見れば 山王權現

地ノ上

打ノ上

四

寂寞とある柴の戸に此御經を讀誦する
 の聲くあだにや風の破るらん
 風波窓を射て燈消え易く
 月踈屋を穿ちて夢なり難き秋のよすがら所からも冷ましき山
 陰に住む共誰か白露の古り行く末ぞ哀なる
 あゆれ馴るも
 山賤の友こそ岩木なりけれ
 *見ぬ色の深きや法の花心く
 染めずゆいか徒に其唐衣の錦にも衣の珠ゆよも掛じ草の袂も
 露涙移るも過ぐる年月の廻り廻れどうたかたの哀れ昔の秋もな
 し
 *扱も我讀誦の聲怠らず夢現ともわかざるに女人の

次第女

月に見え給ふ如何なる人にてましますぞ
 「是の此あたりに
 住む者なるがさも遇ひ難き御法を得花を捧げ禮をなし結縁をな
 すばかり也とても姿を見え参らすれば何をか今の憚りの言の葉
 草の庵の内を露の間なりと法のため結縁に貸させ給へとよ
 げに法フキの結縁ウキの眞ウキに妙なる御事なれ共ウキさり乍らなべてなら
 ざる女人の御身ウキにいかでお宿を参すべき
 「其御心得ウキのさる事
 なれ共よそ人ならず我も亦住み家の爰ぞ小水の
 「同じ流を汲
 むとだに知らぬ他生の縁による
 「二樹の陰の
 「庵の内ウキ

芭蕉

二

上歌同
七
六
小
借
まじ
より

惜しまじな月も假寝の露の宿
軒も垣ほも古る寺の愁ひ
崖寺の經るに破れ魂の山行の深きに痛ましむ月の影も冷まし
や誰かいひし蘭省の花の時錦帳の下との廬山の雨の夜草庵のう
ちぞ思ひるゝ * 一餘に御志深ければ御經讀誦の程内へ御入けへ

女

「さらば内へ参ひべしあら有難や此御經を聽聞申せば我等如きの

ワキ

女人非情草木の類迄も頼母しうこそけへ
「げによく御聽聞け

もの哉唯一念隨喜の信心なれば一切の非情草木の類迄も何の疑

女

のけべき
「扱の殊更有難や扱々草木成佛の謂を猶も示し給へ

ワキ

「藥草喻品あらわれて草木國土有情非情もみな是れ諸法實相の

女

「峯の嵐や
「谷の水音
佛事をなすや寺井の底の心も澄める

上歌同

小
話

折からに
* 燈火を背けて向ふ月の下
共に憐む深き夜の

心を知るも法の人の教への儘なる心こそ思ひの家乍ら火宅を出

づる道なれやされば柳の緑花のくれなゐと知る事も唯其儘の色

香の草木も成佛の國土ぞ成佛の國土なるべし
「ふしぎや扱も

愚なる女人と見るに斯ばかり法の理白糸の解く許りなる心哉

女上

「中々に何疑ひか有明の末の闇路をはるけず今遇ひ難き法を得

(五六七)

芭蕉

身ミとカいカ思シゆン 一ヒにニ遇ユ難ニ法ハにニ遇ユひニ受ケ難キ身ノ人ニ
女 界カをニ 受ル身ヲとヤおボすラんニ 耻シやニ歸ルさノ道ヲやカ
女 にもモ照ル月ノ影ヲさナがラ庭ノ面ノ雪ノうチの芭蕉ノ偽レる姿
女 の眞を見エばいかナらんと思へば鐘ノ聲ヲ諸行無常とナりにけり
女

中入 扱ハ雪ノ中ノ芭蕉ノ偽レる姿と聞えし疑もなき芭
女

蕉ノ女ト現レけるこそふしぎなれ待唯是法ノ奇特ぞと
女 思へばいと夜もすがら月も妙なる法の場風ノ芭蕉や傳ふらん
女 有難や妙なる法ノ教に
女

何アふ事稀なる優曇華の花待得たる芭蕉葉の御法ノ雨も豊かな
女 露ノ惠ヲ受クる身の人衣ノ姿御覽せよかばかりゆつり來ぬ
女 れど花もなき 芭蕉ノ露ノ古り勝る 庭野もせ山蔭ノみぞ
女 寝られねば枕ともなき松が根ノ現れ出づる姿を見れば有つる女
女 人ノ顔ばせ也ともあれ御身のいかなる人ぞ 一いや人との耻か
女 しや眞ノ我ノ非情の精芭蕉ノ女ト現れたり 抑や芭蕉ノ女ぞ
女 と何の縁にか斯る女體ノ身をば受けさせ給ふらん 其御不
女 審ゆ御あやまり何か定めぬ荒金ノ 土も草木も雨より降る
女

芭
 四

女

「雨露の恵を受けながら 我との知らぬ有情非情も 「おのづか
らなる姿となりて 「さも愚なる 「女として さなきだにあ

だなるに芭蕉の女の衣の薄色の花染ならぬに袖のほころびも恥
かしや 夫非情草木といつば眞の無相眞如の體一塵法界の心

終り迄

地の上に雨露霜雪の形を見す 然るに一枝花を捧げ御法の
色をあらゆすや一花開けて四方の春のどけき空の日影を得て楊

梅桃李

梅桃李数々の 「色香に染める心迄 諸法實相隔もなし 水に
近き樓臺の先月を得るなり陽に向へる花木の又春に逢ふ事易き

なる其ことわりも様々のげに目の前に面白やかな春過ぎ夏たけ秋
来る風の音信の庭の萩原先そよぎそよかゝる秋と知らず也身の
古寺の軒の草忍ぶとすれど古へも花の嵐の音にのみ芭蕉葉の脆
くも落つる露の身の置き所なき虫の音の蓬がもとの心の秋とて
もなどか變らん 「よしや思へば定なき世の芭蕉葉の夢の中に
牡鹿の鳴く音の聞き乍ら驚きあへぬ人心思ひいるさの山のあれ
ど唯月獨り伴ひ馴れぬる秋の風の音起臥茂き小笹原しのに物思
ひ立まふ袖暫しいさや返さん * 「今宵の月も白妙の 「水の衣

五

(七七)

七世舞

霜のはかま序舞 霜の經露の緯こそ弱からし 草の袂も久

堅の天つ少女の羽衣なれや 是も芭蕉の羽袖を返し

返す袂も芭蕉の扇の風 茫々と物凄き古寺の庭の淺茅生女郎花刈

萱面影うつろふ露のまに山嵐松の風吹拂ひ吹拂ひ花も千草もち

りぐに花も千草も散散になれば芭蕉の破れて残りけり

四番目 略三番

百 萬 三月 子方百萬の子

竹馬にいざや法の道 誠の友を尋ねん 是の和州三吉野

の者にては 又是に渡りし幼き人の南都西大寺のあたりにて拾ひ

申ては 此頃の嵯峨の大念佛にてはほどに 此幼き人をつれ申し念

佛に参らばやと存ひ 佛の拍子やし妾音頭をと

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛 彌陀頼む 一人の雨夜の月なれや雲晴れれ共

西へ行く 阿彌陀佛やなまうたと 誰かの頼まざる誰か頼

(一七七)

まさるへさ* 「是かや春の物狂」 「亂れ心か戀草の」 「力車に
 七車」 「積むとも盡さじ」 「重く共引けやえいさらえい」と
地上 「一度に頼む彌陀の力頼めや頼め南無阿彌陀佛」 * げにや世々毎
徒仕舞 の親子の道にまとりて 猶此闇を晴れやらぬ 「朧月の
首かせ 薄曇」 「僅に住める世に尙三界の首かせかや牛の車のことゆ
首人 一甲少死」 「引けや引けや
具縛る道 一甲少死」 「引けや引けや
水 にいづくをさして引かるらんえいさらえい」 「引けや引けや
 此車」 「物見なり物見なり」 「げに百萬が姿の」 「本より長き
 黒髪を」 「荊棘の如く亂して」 「古りたる烏帽子引きかつき

「又眉根黒き亂墨」 「現し心か村鳥」 「憂かれと人の添もせて
 「思のぬ人を尋ねれば」 「親子の契麻衣」 「肩を結て裾にさげ
 「裾を結びて肩に懸け」 「菴片」 「菅薦の」 「亂心ながら南無釋
 迦彌陀佛と信心をいたすも我子に遇めん爲なり」 「南無や大聖
 釋迦如來我子に遇めせ狂氣をもとめ安穩に守らせ給ひひへ
 「いかに申すべき事のひ」 「何事にてひぞ」 「是なる物狂をよく
 く見ひへば古里の母にて御入りひ恐れ乍らよその様にて問ふ
 て給ひひへ」 「是の思ひもよらぬ事を承ひもの哉臆て問ふて

参らせうするにていかに。是なる狂女おことの國里のいづくの
 者ぞ。 [是の奈良の都に百萬と申す者にてい。 夫何故斯様に狂人となりたるぞ。 夫に死して別れ唯一人ある忘れ形見の縁子に生きて離れてい程に思が亂れてい。 扱今も子といふ者のあらば嬉かるべきか。 仰迄もなし夫故にこそ亂髮の遠近人に面を晒すも若も我子に廻りや逢ふと車に法の聲立て念佛申し身を碎き我子に逢ゆんと祈るなり。 げに痛めしき御事哉眞信心私なくの斯程群集の其中になどかの廻り逢ゆざらん

女 「嬉しき人の言葉哉。夫に就ても身を碎き法樂の舞を舞ふべき也。唯

してたべや人々よ忝なくも此お佛も羅睺爲長子と説き給へば

我子に鸚鵡の袖なれや親子鸚鵡の袖なれや百萬が舞を見給へ

女上 「百や萬の舞の袖。 我子の行へ祈るなり。 げにやおもんみればいづくとても住めば宿。 住まぬ時に故郷もなし此世のそも

終り迄

いづくの程ぞや。 * 牛羊徑街に歸り鳥雀枝の深さに集まる。 げに世の中の仇波の寄る邊のいづく雲水の身の果いかに檜の葉の梢の露の古里に。 憂き年月を送りしに。 さしも二世と掛し中

の契の末の花髪結びもとめぬ仇夢の長き別れとなり果て
 比
 目（後入）の枕しき浪の 哀はかなき契かな（中） 奈良坂の兒の手拍の二
 面（後入）兔にも角にもねぢけ人のなき跡の涙こそ袖の柵隙なきに思ひ
 かさなる年並の流るゝ月の影惜き西の大寺の柳蔭縁子の行へ白
 露の置別れていつち共知らず失せにけり一方ならぬ思草葉末の
 露もあをによし奈良の都を立出でてかへり三笠山佐保の川をう
 ち渡りて山城に井手の里玉水の名のみして影うつす面影淺まし
 き姿なりけりかくて月日を送る身の羊の歩み隙の駒足に任せて

行く程に都の西と聞えつる嵯峨野の寺に参りつゝ四方の氣色を
 眺むれば「花の浮木の龜山や雲に流るゝ大井河真に浮世の嵯
 峨なれや盛り過ぎ行く山櫻嵐の風松の尾小倉の里の夕霞立ちこ
 そ續け小忌の袖かざしぞ多き花衣貴賤群集する此寺の法を尊（中）
 彼よりも是よりも唯此寺ぞ有難き忝なくも斯る身に申すゆ恐れ
 なれ共二佛の中間我等如きの迷ひある道明らめん主とて毘首羯
 磨が造りし赤梅檀の尊容瞻て神力を現じて天竺震且我朝三國に
 渡り有難くも此寺に現じ給へり「安居の御法と申すも御母摩

五番目

船辨慶

十一月

前シテ 靜
ワキ 辨 慶

千方源義經從者
後シテ 平知盛

大第ツツワ
今日思ひ立つ旅衣ツツワ歸洛をいつと定めん 一斯様にひ者の

西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にてひ扱も我君判官殿の頼朝の
御代官として平家を亡ぼし給ひ御兄弟の御中日月の如く御座ひ
べきをいひかひなき者の讒言により御中たがわれし事返すく
も口惜しき次第にては然れ共我君親兄の禮を重んじ給ひ一先都
を御開きあつて西國の方へ御下向あり御身にあやまりなき通り
を御歎きあるべき爲に今日夜をこめ淀より御船に召され津の國

(一八七)

船辨慶

尼が崎大物の浦へと急ぎゆ
 頭の文治の初めつ方頼朝義經不
 會の由既に落居し力なく
 判官都を遠近の道せばくならぬ其
 さきに西國の方へと志し
 まだ夜深くも雲居の月出づるも惜
 しき都の名残一年平家追討の都出でにゆ引きかへて唯十餘人す
 上歌、下歌、
 上り下るや雲水の身の定な
 ぎ習ひかな。世の中の人何とも石清水く澄み濁るをば
 神ぞ知らんと高き御影を伏拜み行けば程なく旅心潮も波も共に
 引大物の浦に着きにけり
 御急ぎゆ程に是の早大物の

浦に御着きにてゆ某存じの者のゆ間御宿の事を申し付けりうする

にてゆいかに此家の主の渡りゆか
 誰にて御入ゆぞ
 一いや

武藏にてゆ
 扱唯今の何の爲に御出でゆぞ
 さんゆ我君を

是迄御供申してゆ御宿を申ゆへ
 さらば奥の間へ御通ゆへ御

用心の事の御心安く思し召されゆへ
 いかに申上ゆ恐れ多き

申事にてゆへ共正しく静の御供と見え申てゆ今の折節何とやら

ん似合ゆぬ様に御座ゆへば天晴是より御かへしあれかすと存ゆ

「兎も角も辨慶計らひゆへ
 畏てゆさらば静の御宿へまゐりて

(六八七)

ワキ

「いや〜是の苦からずい唯人口を思し召すなり御心變るとな思

しめしそと涙を流し申しけり 一「いや兎に角に數ならぬ身に

小話

怨みもなければ共是の舟路の門出なるに *「浪風も静を留め給ふ

か〜涙を流し木綿四手の神懸て變らじと契りし事も定な

やげにや別れよりまさりて惜しき命哉君に二度逢ふんとぞ思

ふ行末 *「いかに辨慶靜に酒をすゝめいへ 一「畏ていげに〜是

の御門出の行末千代ぞと菊の盃靜にこそめすゝめけれ 一「妾の

君の御別れやる方なきにかきくれて涙にむせぶ許り也 一「いや

〜是の苦からぬ旅の舟路の門出の和歌唯一さしと勸むれば

「其時靜の立ち上り時の調子を取りあへず渡口の郵船の風靜まつ

て出づ 一「波頭の謫所の日晴れて見ゆ 一「是に烏帽子のひ召さ

れいへ 一「立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふるも耻かしや

傳へ聞く陶朱公の勾踐を伴ひ會稽山に籠り居て種々の智略を

ぐらし終に吳王を亡ぼして勾踐の本意を達すとかや *然るに

勾踐ゆふたゝび世を取り會稽の耻を雪ぎしも陶朱功をなすとか

やされば越の臣下にてまつりごとを身に任せ高名富み貴く心の

(七八七)

ワキ

船辨慶

如くなるべきを功なり名遂げて身退く天の道と心えて小船に
 棹さして五湖の遠島を楽しむ。かゝる例も有明の月の都をふ
 り捨て、西海の波濤に赴き御身の科のなき由を歎き給ふば頼朝
 も終にの靡く青柳の枝を連ぬる御契などか朽ちしはつべき
 唯頼め（地）下（根）唯頼めしめぢが原のさしも草。我世の中にあらん
 限り（下）の（上）「かく尊詠の偽なくかかく尊詠の偽なくの聽て御代に
 出舟の船子どもはや纜をとくく」とく。勸め申せば判官も
 旅の宿りを出て給へば。「静の泣くく鳥帽子直垂ぬぎ捨て、

涙にもせぶ御別見るめも哀なりけり。静の心中察し申
 てひ聽てお舟を出さうするにてひ。いかに申ひ。何事にて
 ひぞ。「君よりの御誕にゆけふ浪風荒くひ程に御逗留と仰出
 だされてひ。何と御逗留とひや。いさんひ。是の推量申す
 に。静に名残を御惜みあつて御逗留と存ひ先御思案あつて御覽ひ
 へ。今此御身にて斯様の事の御運もつきたると存ひ其上一年渡邊
 福島を出てし時の以ての外の大風なりしに君御舟を出だし平家
 を止ばし給ひし事今以て同じ事をかし急ぎお舟を出たすべし

結船の辨に度

「げにぐは是の理なり。いつくも敵と夕浪の。立ち騒ぎつゝ舟子ども。えいやくと夕汐につれて舟をを出しける。あら笑

止や風が變つてひあの武庫山下風諭鶴羽が嶽より吹き下す嵐は此

御舟の陸路に着くべき様もなし皆々心中に御祈念ひへ。いかに

に武藏殿此御舟にのあやかしが付けてひ。あ、暫く左様の事

をば船中にての申さぬ事にしてひあら不思議や海上を見れば西國

に下ひし平家の一門各々浮かみ出でたるをやが。る時節を窺

ひて恨をなすも理也。いかに辨度。御前には。今更驚く

べからずたとひ惡靈恨をなす共抑何事のあるべきを惡逆無道の

其積り神明佛陀の冥感に背き天命に沈みし平氏の一類。主上

を始め奉り一門の月卿雲霞の如く浪に浮かみて見えたるをや

抑々是の桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり。あち珍らしや

いかに義經思ひもよらぬ浦波の。聲を知るべに出舟の

「知盛が沈みし其有様に。又義經をも海に沈めんと夕浪に浮か

める長刀取り直し巴波の紋あたりを拂ひ潮を蹴立て惡風を吹き

かけ眼もくらみ心も亂れて前後を忘する許りなり。其時義經

船辨度

六

少しも騒がすく打物抜き持ち現の人に向ふが如く言葉を交し戦ひ給へば辨慶おし隔て打物業にて適ふまじと數珠さらくと押しもんで東方降三世南方軍奈利夜又西方大威徳北方金剛夜又明王中央大聖不動明王のさつぐにかけ祈り祈られ惡靈次第に遠ざかれれば辨慶舟子に力を合せお船を漕ぎのけ汀によすれば猶怨靈の慕ひ來るを追つ拂ひ祈りのけ又引汐に揺られ流れ又引汐にゆられ流れて跡白波とそなりにける

不動明王の事

前シテ 女
ツレ 女(二人)

ワキ 鹿嶋の神主
後シテ 北野の神

ツワ次
ヨクキ第

四方の山風長閑なるく雲井の春を久しき「抑々是の鹿嶋の神職何某との我事也我此度都に上り洛陽の名花残りなく一見仕てい又北野右近の馬場の花今を盛りなる由承りい間今日右近の馬場の花を眺めばやと存い「雲の行くそなたやしるべ櫻狩く雨の降りきぬ同じく濡る共花の蔭ならばいさや宿らん松蔭の行へも見ゆる梢より北野の森も近づくや右近の馬場に着にけり」急ぎい程に是のけや右近の馬場に着ていあ

れを見れば花見の人々と見えて。車をならべ輿を續け眞に面白う
 け暫く休らひ花を眺めばやと存ひヨクシテ春風桃李花の開くる時人
 の心も花やかにあくがれ出づる都の空げに長閑なる時とかや
 見渡せば柳櫻をこきまぜて錦を飾る花車ニ句來る春毎に誘ゆる
 る心も永き氣色かな。花見車の八重一重見えて櫻の色々に
 ひをりせし右近の馬場の木の間より影も匂ふや朝日寺の
 春の光りも天満てる神の御幸の跡古りて松も木高き梅が枝の立
 枝もみえて紅の初花車廻る日の轅や北に續くらんツヨク長

閑なる頃の彌生の花見とて右近の馬場の並木の櫻の陰踏む道に
 休らへばヨクげにや遙に人家を見て花あれば即ち入るなれば木
 蔭に車を立て寄りり 一向ひを見れば女車の所からなる昔語思
 ひぞ出る右近の馬場のひをりの日にあられ共見ずもあらず見
 もせぬ人の戀しくあやなくけふや詠め暮らさん是業平の此所
 にて女車を詠みし歌今更思ひ出られたり 一あら面白の口ずさ
 みや右近の馬場のひをりの日向ひに立てる女車の所からなる昔
 語恥かし乍ら今又我身の上に業平の何かあやなくあきてい

右近

二

ん思おもひのみこそしるべなりしを
 「左ひだり様に詠よめめし言ことの葉はの其その舊ふる跡あとも爰こゝなれば今いま又また斯か様に言こと問とふ人もいつなれもせぬ人なれ共
 「唯ただ花はなゆゑに北きた野のの森のにて
 「言葉ことばを交ませば
 「見みずもあらず
 見みもせぬ人や花はなの友ともく
 知るも知らぬも花はなの陰かげに相あ宿とどりして
 諸もろ人のいつしかなれて花はな車ぐるまの榻たた立たて木きの下のに下くだり居ゐていざや眺ながめんげにや花はなの下のに歸かへらん事ことを忘わするゝの美う景けいによりて花はな心こゝろ馴なれ
 くそめて眺ながめんいざく馴なれて眺ながめん百ひゃく千せん鳥とり花はなに馴な行く仇あだし
 身みのけかななき程ほどに羨うらやままれて上うへの空そらの心こゝろなれや上うへの空そらの心こゝろなれ

地ち上じやう

げに名なにし負おふ神かみ垣かきや北きた野のの春はるもときめける神かみの名な所ところ數かず々に

地ち上じやう

「眺ながむれば都みやこの空そらの遙とほ々と霞かすみのたるや北きた野の宮みや居ゐ御ご覽らんぜよ時ときを得えて

地ち上じやう

花はな櫻おう葉はの宮みや所ところ 「花はなの濃の染ぞめの色いろのけて紅べに梅うめ殿どのや老おい松まつの
 「緑きよよ

地ち上じやう

り開ひらけ初はじめて一夜ひとよ松まつも見みえたり 「日ひ影かげのそらもあかねさす

地ち上じやう

「紫むらさ野の行ゆき標しるし野の行ゆき
 野の守まもり見みずや君きみが袖そで古ふるき御ご幸ゆきの物もの見みとて

地ち上じやう

車くるまも立たつや御ご輿こし岡おか是こゝぞ此こゝ神かみの御ご旅たび居ゐの右みぎ近ちかの馬うま場ばのたらり神かみ幸ゆきぞ

地ち上じやう

尊たうかりける 「あら有あ難がたの御ご事ことやかくしも委まかす語ことばり給たまふ社やしろ々の

地ち上じやう

御ご本ほん地ぢを猶なほ々々教おしへおゆしませ 「眞まことの我われの此こゝ神かみの末すえ社やしろと現あられ君きみ

地ち上じやう

御ご本ほん地ぢを猶なほ々々教おしへおゆしませ 「眞まことの我われの此こゝ神かみの末すえ社やしろと現あられ君きみ

が代を守の神と思ふべしワキ「よくく聞けば有難や守りの神と
 の扱々何れの靈神にて斯様に現れ給ふらん」シテ「あら恥かしや神
 ぞと何あさまに何と岩代の 待つことありや有明のく
 月も曇らぬ久堅の天照る神にて櫻の宮と現れ爰に北野の櫻葉
 の神と夕べの空晴れて月の夜神樂を待ち給へと花にかくれ失せ
 にけりや花に隠れ失せにけり上歌「げに今とても神の代のく
 誓ひの盡きぬ驗とて神と君との御惠眞なりけり有難やく
後上「すめらぎの畏き御代を守るなる右近の馬場の春を得て花上苑に

明かにして輕軒九陌の塵に交ゆる神慮和光の影も曇りなき君の
 威光も影高く花も搖がず治まる風も長閑なる代のためたさよ
地上「曇なき天照る神の惠みを受けての櫻の宮居と現れ給ひ」シテ上「爰に
 北野の神の宮居に」地上「花櫻葉の神と現れ曇らぬ威光を顯し衣の
 袖もかざしの花ざかり」中ノ舞「月も照り添ふ花の袖く雪を廻ら
 す神かぐらの手の舞ひ足踏拍子を揃へ聲すみ渡る雲の棧花に戯
 れ枝に結ばれかざしも花の糸ざくら」破ノ舞「治まる都の花ざかり
 東南西北も音せぬ波の花も色添ふ北野の春の御池の水に」四

御影を映し映しうつろふ櫻衣の裏ふき返す梢に上り枝に木傳ふ
花鳥のとぶさに翔り雲に傳ひ遙かに上るや雲の羽風遙に上るや
雲の羽風に神の上らせ給ひけり*

女郎花

八月

前シテ老
ワキ僧

兼

後シテ 小野頼風
後ツレ 頼風の妻

ワキ同

是の九州松浦瀉より出たる僧にては我未だ都を見ずし程に此秋

思ひ立ち都に上りし道行住み馴れし松浦の里を立ち出て

末不知火の筑紫瀉いつしか後に遠ざかる旅の道こそはるかなれ

急ぎし程に是の早津の國山崎とかや申し向ひに拜ま

れさせ給ふの石清水八幡宮にて御座し我國の宇佐の宮と御一體

なれば詣らばやと思ひし又是なる野邊に女郎花の今を盛りと咲

き亂れては立寄り眺めばやと存し 扱も男山麓の野邊に来て

女郎花

見れば千種の花盛んにして色を飾り露を含みて虫の音迄も心あり顔なり野草花を帯びて蜀錦を連れ桂林雨を拂つて松風を調む

此男山の女郎花の古歌にも詠まれたる名草なり是も一つの家土産なれば花一本を手折らんと此女郎花のほとりに立ちよれば

「のう其花な折給ひそ花の色の蒸せる粟の如し俗呼ばつて女郎とす戯れに名を聞いてだに偕老を契るといへりましてや是の男山の名を得て咲ける女郎花の多かる花に取りわきてなど情なく手折り給ふあら心なの旅人やな」
「扱御身のいかなる人にてまし

ませば是程咲き亂れたる女郎花をば惜み給ふぞ
「惜み申すこ

そ理なれ此野邊の花守にてい
「縦ひ花守にてもましませ御覽

いへ出家の身なれば佛に手向と思し召し一本御許しいへかし

「げにぐ出家の御身なれば佛に手向と思ふべけれど彼菅原の神

木にも折らで手向よと其外古き歌にも折取らば手ぶさに穢る立

て乍ら三世の佛に花奉るなどいへば殊更出家の御身にこそ猶

しも惜み給ふべけれ
「左様に古き歌を引かば何とて僧正遍照

ゆ名にめで折れる計りぞ女郎花との詠み給ひけるぞ
「いや

女郎花

二

さればこそ我落ちにきと人に語るなと深く忍ぶの摺衣スリイロモの女郎ドコロと
 契る草の枕をならべし迄ウツカの疑ウタガひなければ其御たとへを引き給ヲ
 ば出家の身にての御誤ミトケり ワキカ一斯様スサマに聞けば戯ウツクれ乍ら色香イロカにめづ
 る花心ハナココロ兎角申すに由ユぞなき暇ヒマ申て歸るとてもときし道ミチに行き過
 ぐる シテ「おう優ユしくも所の古歌をば知るしめしたり女郎花憂ウレし
 と見つゝぞ行き過ぐる男山オトヤマにし立てりと思へば 同下「優ユしの旅人
 や花ハナの主ヌシある女郎花ドコロよし知る人の名にめでてゆるし申すなり
 本折ホマシらせ給へや 上歌同 * なまめき立てる女郎花ドコロ シテうしろめたく

や思オモふらん女郎ドコロと書ける花の名に誰タレ借老カキヤウを契りけん彼邯鄲カクシヤンの假カ
 枕マク夢ユメの五十の哀れ世のためしも真マコトなるべしや ワキ * 「此野邊コノノヘ
 の女郎花ドコロに眺め入りて未だ八幡宮ヤシロヤに参らずひ シテ「此尉コノウヂこそ唯今
 山上ヤマノ上する者にてひへ八幡ヤシロヤへの御道ミチしるべ申ひべしこなたへ御入ミコ
 ひへ ワキ「聞きしに越えて貴ウツクく有難アリガかりける靈地レイヂかな シテ「山下ヤマノ下の
 人家トコロ軒ケンを並べ 二人和光ワコウの塵チリも濁江ナカエの河水カハヅミに浮ウむ鱗ウロコのげにも生ナけ
 るを放ハつかと深フカき誓チカひもあらたにて惠メぞ繁シき男山オトヤマ榮サカ行く道ミチの有
 難マシさよ 同下比ヒの八月半ハチグハツノナカの日神ヒコガミの御幸ミコトキなるお旅所ツツミをふしおがみ

女郎花

上歌
六〇八
久堅リ久方の月の桂の男山

久堅リ久方の月の桂の男山ノさやけき影の所から紅葉も照り添ひ
て日もかげろふの石清水苔の衣もたへなりや三つの袂に影うつ
るるしの箱を納むなる法の神宮寺有難かりし靈地かな巖松峙
つて山聳え谷廻りて諸木枝を連れたり鳩の嶺越し來て見れば三
千世界もよそならず千里も同じ月の夜の朱の玉垣御戸代の錦か
けまくも忝なしと伏拜むシテ「是こそ石清水八幡宮にて御座ひへ
よくく御拜ひへ早日の暮てひへば御暇申ひべし」のうく
女郎花と申す事の此男山につきたる謂にてひか「あら何とも

七〇八

ワキ

なや前に女郎花の古歌を引いて戯を申ひも徒事にてひ女郎花と
申すこそ男山に付たる謂にてひへ又此山の麓に男塚女塚とてひ
を見せ申ひべし此方へ御入ひへ是なるか男塚又此方なるか女塚
此男塚女塚に就て女郎花の謂もひ是か夫婦の人の土中にてひ
「扱其夫婦の人の國の何處名字のいかなる人やらん」女が都の
人男の此八幡山に小野の頼風と申し人耻しや古へを語るも
さすが也申さねば又なき跡を誰か稀にも弔の便を思ひ頼風の更
行月に木隠れて夢の如くに失にけりシテ「一夜伏す男鹿の

女郎花

四

角の塚の草ツノノツカノクサ 陰より見えし亡魂を弔ふ法の聲立て南無幽靈

出離生死頓證菩提シュツリシヨウトウシヨウトウ おう廣野人稀也我古墳ならで又何物ぞ

骸を争ふ猛獸の禁ずるに能はず 懐しや聞けば昔の秋の風

「うら紫か葛の葉の 歸らば連れよ妹背の波 消にし魂の女

郎花花の夫婦の現れたりあら有難の御法やな 影の如に亡魂

の現給ふ不思議さよ 妾の都に住し者彼頼風に契を籠しに

「少し契の障ある人間を真と思ひけるか 女心のはかなさの都

を獨あくがれ出て猶も恨の思ひ深き放生川に身を投る 頼風

是を聞つけて驚騒ぎ行き見れば敢なき死骸計り也 泣く死

體を取上げて此山本の土中に籠しに 其の塚より女郎花一本

生出たり頼風心に思ふ様扱の我妻の女郎花に成けるよと猶花色

も懐しく草の袂も我袖も露觸れ初て立寄れば此花恨みたる氣色

にて夫のよれば靡き退き又立退けば元の如し 爰によつて貫

之も男山の昔を思て女郎花の一時をくねると書し水莖の後の世

迄も懐しや頼風其時に彼哀さを思ひとり無慙やな我故によ

しなき水の泡と消て徒なる身となるも偏に我科ぞかし若かじ浮

女郎花

五

世に住まぬ迄と同じ道にならんとて、「續いて此河に身を投て、
 共に土中に籠しより女塚に對して又男山と申す也其塚は是主の
 我幻乍ら來りたり跡弔ひてたび給へ」
 邪姪の悪鬼の身を責て、其念力の道もさかしき劔の山の上
 に戀しき人の見えたり嬉しやとて行き登れば劔の身を通し磐石
 の骨を碎くこの抑いかに恐しや劔の枝の撓む迄いかなる罪のな
 れる果ぞやよしなかりける花の一時をくねるも夢ぞ女郎花露の
 臺や花の縁に浮めてたび給へ罪を浮めてたび給へ*

キリ上
ツヨク
カケリ
打上

四番目
略二番

自然居士

季なし

ワシキテ
ワキツレ人
自然居士
商人

于方女

見
(話なし)

狂言

「斯様にひ者の東山雲居寺のあたりに住居仕る者にてひ爰に自然
 居士と申す喝食の御座ひが一七日説法を御述べひ今日結願にて
 御座ひ皆々参りて聽聞申しひへ」
 「雲居寺造營の札召されひへ」
 夕べの空の雲居寺月待つ程の慰めに説法一座述べんとて導師講
 座に上り發願の鐘打ちならし謹み敬つて白す一代教主釋迦牟尼
 寶號三世の諸佛十方の薩埵に申して白さく總神分に般若心經や
 是の諷誦を御上ひか
 「げに是の美しき小袖にてひ急いで此諷

自然居士

誦文を御覽ひへ、^{シテ}「敬つて申す受くる諷誦の事三寶衆僧の御布

施一裏右志す所の二親聖靈頓證佛果の爲身の代衣一重三寶に供

養し奉る彼西天の貧女が一衣を僧に供せし身の後の世の逆縁

今の貧女の親の爲^{ヨウ}身の代衣恨めしきく、^{中ニサニ}浮世の中をとく

出て先考先妣諸共に同じ臺に生れんと讀み上げ給ふ自然居士墨

染の袖を濡せば數の聽衆も色々の袖を濡さぬ人ゆなし

斯様にひ者の東國方の人商人にてひ我此度都に上り數多人を買

取りてひ又十四五計りなる女を買取りてひが昨日少しの間暇を

乞ひてひ程にやりてひが未だ歸らずひのう渡りひか昨日の幼き

者の親の追善とやらん申てひひつる程に説法の座敷にあらうす

ると存ひ自然居士の雲居寺に御座ひ程に立越見うずるにてひ

然るべうひ^{ワキ}「やさればこそ是にひのう急いで連て御入ひへ

「やるまいぞ^{狂言}「用がある^{ワキ}「用があらば連れて行けいかに居士

へ申ひ^{シテ}「何事にてひぞ^{狂言}「唯今諷誦を上てひ女をあらけなき

男の來りひて追つ立て行きひ程にやるまじきと申ひへば用があ

ると申ひ程にやりてひ^{シテ}「あら曲もなやひ始より彼女ゆやうあ

自然居士

りげに見えては、其上諷誦を上げゆにも、唯小袖共書かず身の代衣
 と書いてはよりちと不審にゆひしが、居士が推量申すの、彼者の親
 の追善の爲に、我身を此小袖に代へて諷誦を上げたると思ひゆさ
 めらば、唯今の者の人商人にてゆべし。彼の道理こなたの僻事にて
 ゆ程に御身のとめたる分にてゆなりゆまじ。 狂言 一人商人ならば
 東國へ下りゆべし。大津松本へ某走り行きとめうするにてゆ。
 「暫く御出てゆ分にてゆなりゆまじ。居士此小袖を持って行き、彼女に
 代へて連れて歸らうするにてゆ。 狂言 「いや、夫の今日迄の御説法が

無に成ゆべし。 シテ 「否々、説法の百日千日聞し召されても善惡の二
 つを辨へん爲ぞかし。今の女の善人商人の悪人善惡の二道爰に極
 つてゆひのいかにけふの説法の是迄也、願以此功德普及於一切我等
 與衆生皆共成佛道修行の爲なれば。 地上 「身を捨て人を助くべし
ワキ上 「今出でてそのこともいさや白波の此舟路をや急ぐらん。 シテ 「舟なく
 ととても説く法の 地 「道にこゝろをとめよかし。 シテ 「のうく其御
 舟へ物申さう。 ワキ 「是の山田矢橋の渡舟にてもなきものを何しに
 招かせ給ふらん。 シテ 「我も旅人にあらざれば、渡りの舟とも申さば

こそ其御舟へ物申さう
「さて此舟をば何舟と御覽じてひぞ

「其人買舟の事さうよ
「あゝ音高し何とく
「道理く餘

所にも人や白波の音高しとの道理也ひとかいと申つるの其舟漕

ぐ權の事さうよ
「櫓にのからるといふものありひとかいと云

ふ權のなきに
「水の煙の霞をば一霞二霞一汐二汐なんどい

へば今漕ぎ初むる舟なれば一權舟との僻事か
「げに面白くも

述べられたり扱々何の用やらん
「是の自然居士と申す説經者

にてひが説法の場さまされ申す怨申しに來たり
「説法にの道

理を述べ給ふ我等に僻事なきものを
「御僻事共申さばこそ兎

に角に元の小袖の參らする舟に離れて適のじと裳裾を波に浸し

つ、舟端に取り付きひき留む
「あら腹立や去ながら法衣に恐

れて得の打たず是も汝が科ぞとて櫓權を以てさんぐくに打つ

「打たれて聲の出さるの若空しくやなりつらん
「何しに空しく

なるべきと
「引立て見れば
「身にの繩
口にの綿の轡を

はめ泣け共聲が出てはこそ
「あら不便の者や臆て連れて歸ら

うずるぞ心安く思ひひへ
「のう自然居士舟より御下りひへ

自然居士

シテ

「此者を賜りゆへ小袖を召されゆ上の御損もゆまじ」
「参らせ度」

ワキ

ゆひへ共爰に笑止がゆ
「何事にてゆぞ」
「さんゆ我等が中に

ワキ

大法のゆ夫をいかにと申すに人を買取つて再び返さぬ法にてゆ

程に得参らせゆまじ
「委細承りゆ又我等が中にも堅き大法の

シテ

ゆ斯様に身を徒になす者に行き逢ひ若し助け得れば再び庵室へ

歸らぬ法にてゆ程に其方の法をも破るまじ又此方の法をも破ら

れ申すまじ所詮此者を連て奥陸奥の國へ下る共舟よりゆ下り

ワキ

まじくゆ
「舟より御下りなくゆ拷訴を致さう」
「拷訴といつ

シテ

ば捨身の行
「命を取らう」
「命を取る共ふつと下まじい

ワキ

シテ

「何と命を取る共ふつと下りまじいとゆや」
「なかくの事」

ワキ

シテ

ワキ

ワキツレ

「いや此自然居士にもてあつかうてゆよのう渡りゆか」
「何事に

ワキ

ツレ

てゆぞ
「扱是ゆ何と仕りゆべき」
「是ゆお返しなうてゆ叶ひ

ゆまじよくく物を案じゆに奥より人商人の都に上り人に買ひ

かねて自然居士と申す説經者を買取り下りたるなんど申ゆゆ

ワキ

ば一大事にてゆ程にお返しなうてゆ叶ひゆまじ
「我等も左様

に存ゆさり乍ら唯返せば無念にゆ程に色々になぶつて返さうす

自然居士

五

るにてい ツレ 「尤然るべうい ワキ 「のうく自然居士急いで舟より

御上りいへ シテ 「いやく聊爾に下りまじくい ワキ 「何の聊爾の

いべき唯御上りいへ シテ 「あ、船頭殿のお顔の色こそ直ていへ ワキ

「いやちつとも直りいまじ。又是なる人の申されいゆ今度始めて都

へ上りてい自然居士の舞の事を承り及びてい一さし舞ふて御

見せあれと申されい シテ 「惣じて居士の舞まふたる事なくい

「夫の御偽にてい一年今の如く説法御述いひし時いて聴衆の眠覺

さんと講座の上にて一さし御舞ありし事奥迄も其聞えい程に一

さし御舞いいへ シテ 「おう夫の狂言綺語にてい程に左様の事もい

べし舞を舞いいゆば此者を賜りいべきか ワキ 「先御舞を見て其時

の仕義によつて參らせいべし。是に烏帽子のい。是を召して御舞い

いへ シテ 「よくく物を案ずるに終に此者を賜わらんずれ共唯

返せば損なり居士を色々になぶつて耻を與へうといな餘りに夫

ゆつれなうい ワキ 「何のつれなういべき シテ 「志賀辛崎の一つ松

「つれなき人の心かな シテ 「抑々舟の起りを尋ぬるに水上黃帝の御

宇より事起つて流れ貨狄がはかりことより出たり シテ 「爰に又蚩

(一ニ八) 終り迄

自然居士

(二二八)

尤といへる逆臣あり。彼を亡さんとし給ふに烏江といふ海を隔
 て攻むべき様もなかりしにや。黄帝の臣下に貨狄といへる士卒
 あり或時貨狄庭上の池の面を見渡せば折節秋の末なるに寒き嵐
 に散る柳の一葉水に浮みしに又蜘蛛といふ虫是も虚空に落ける
 が其一葉の上に乗れりつ。次第くにごさかぎにのいとほかなくも
 柳の葉を吹きくる風に誘われ汀によりし秋霧の立くる蜘蛛の振
 舞げにもと思ひ初しより工て舟を造れり黄帝是に召されて烏江
 を漕渡りて蚩尤を易く亡し御代を治給ふ事一萬八千歳とかや

然れば船のせんの字をきみにすむと書きたり扱又天子の御顔
 を龍顔と名付け奉り舟を一葉と云ふ事此御宇より生まれり又君
 の御座舟を龍頭鷁首と申すも此御代より起れり。いかに申ひ。

我等が舟を龍頭鷁首と御祝ひし事過分に存ひとてもの事にさ
 らをすつて御見せひへ。さらば竹を賜りひへ。折節船中に

竹がひぬぬよ。苦しからずひ彼佛の難行苦行し給ひしも一切
 の衆生を助けん爲ぞかし居士も亦其如く身をこつかに碎きても

彼者を助けん爲なり夫さゝらの起りを尋ぬるに東山にある御僧

自然居士

七

の扇の上に木の葉のかりしを持ちたる數珠にてさらりくと
拂ひしよりさゝらと云ふ事始りたり居士も亦その如くさゝらの

こにの百八の數珠さゝらの竹にの扇の骨おつとり合せ是をする
所志賀の浦なれば 波や〜志賀辛崎の松の上葉を
さらりくとさゝらのまねを數珠にてすればさゝらより猶手を
もするもの今の助けてたび給へ 手をするなど承りし程に

參らせしへしとてもの事に羯鼓を打つて御見せしへ

鼓の波の音〜寄せての岸をとうとの打ち雨雲迷ふ鳴神のと

どろくと鳴る時の降り来る雨ゆはらくはらと小笹の竹のさ
らをすり池の水のとうくと鼓を又打ちさゝらを猶摺り狂言
乍らも法の道今の菩提の岸に寄せ来る船のうちよりいと
打連れて共に都に上りけり

五番目

大

會

季なし

前シテ 客 僧 後シテ 天 狗
ワキ山 僧 後ツレ 帝釋天

(七二八)

夫一代の教法の五時八教をけづり教内教外を分たれたり五時といつば華嚴阿含方等般若法華四教といは藏通別圓たり遮那教主の祕藏を受け五想成身の峯を開きしより此方誰か佛法を崇敬せざらんげに有難き御法とかや。鷲の深山をうつすなる。一佛乗の嶺にの眞如の惠日圓かなり鳥三寶を念じて風常樂とおとづる。げにたぐひなき深山かな。月の古殿の燈を掲げ風空廊の帯となつて石上に塵なく滑らかなる苔路を歩みよ

大會

木の葉をさつと吹き上げて梢に上り谷に下りかき消すやうに失
 せにけり後シテ夫山の少さき土くれを生ずかるが故に高き
 事をなし海中大橋の細き流れを厭はず故に深き事をなす打上ふしぎや
 虚空に音楽響き佛の御聲あらたに聞ゆ兩眼を開きあたり
 を見れば「山の即ち靈山となり」大地の金瑠璃「木の又
 七重寶樹と成て」釋迦如來獅子の座に現れ給へば普賢文殊左
 右に居給へり菩薩聖衆雲霞の如く砂の上龍神八部おのく
 拜し圍繞せり迦葉阿難の大聲聞迦葉阿難の大聲聞の

面に座せり空より四種の花降り下り天人雲に連り微妙の音楽を
 奏す如來肝心の法文を説き給ふげに有難き景色かな打聖僧正其
 時忽ちに信心を發し隨喜の涙眼に浮み一心に合掌し歸命
 頂禮大恩教主釋迦如來と恭敬禮拜する程に俄に台嶺響き震動し
 帝釋天より下り給ふと見るより天狗おのく騒ぎ恐れをなしけ
 るふしぎさよ上歌同刹那が間に喜見城の帝釋現れ數千の
 魔術をあさまになせばありつる大會散りぐになつてぞ見えた
 りける打上帝釋此時怒り給ひかばかりの信者をなど驚か

大會

三

すと忽ちさんぐに苦を見せ給へば羽風を立て、翔らんとすれ
共もちり羽になつて飛行もかなければ恐れ奉り拜し申せば帝釋
即ち雲路をさして上らせ給ふ其時天狗の岩根を傳ひ下るとぞ見
えし岩根を傳ひ下ると見えて深谷の岩洞に入りにつけり

四番目
略協能
三番目

三

輪

九月

前シテ 里 女
ワキ 玄賓僧都

後シテ 三輪明神

ワキ詞

是の和州三輪の山陰に住居する玄賓と申す沙門にては扱も此程
いづく共なく女性一人毎日權闍伽の水を汲て来りけり今日も来り
てゆめばいかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひけり三輪の山も
と道もなし、檜原の奥を尋んげにや老少不定とて世の
中々に身の残り幾春秋をか送りけん淺ましかやなす事なくて徒に
憂年月を三輪の里に住居する女にては又此山陰に玄賓僧都とて
貴き人の御入り程にいつも權闍伽の水を汲てまぬらせけり今日も

又参らばやと思ひゆ ワキ 「山頭サントウにの夜孤輪ヨコリンの月ツキを戴イタき洞口ドクにの朝アサ 一片イチペンの雲クモを吐ハクく山田守サンダノモリの僧都ソウトの身ミこそ悲カナしけれ秋果アキノミてぬれば訪ウラガヒふ人もなし 女 「いかに此庵室アチノシムの内ウチへ案内申案内ゆゆん ワキ 「案内申案内さ

んとゆいつも来れる人か 女 「山影門サンカゲノカドに入入て推おせ共出共出す ワキ 「月光ツキノミチ

地に鋪フいて掃ハへ共又生共又生ず 二人 鳥聲トリノネとこしなへにして老生ロウセイと静シヅな

る山居サンキ 同下 柴チの編戸ヒを押開おきかくしも尋ね切切極罪キョクザイを助たすけてたび

給たまへ 巻小話 秋寒アキノサムイき窓マドの内ウチへ軒ノの松風マツノカゼうちしぐれ木キの葉ハかさし

く庭ニハの面門オモテカドの葎ワラや閉とぢつらん下樋シタヒの水音ミヅノネも苔コケに聞きえて静しずなる此

山住ヤマヅミぞ寂さびしき 女 「いかに上人ジョウジンに申ますべき事コトのゆ秋アキも夜寒ヨサムイに成なゆへば御衣ゴロモを一重賜ヒツゆりゆへ ワキ 「易やすき間の事コト此衣ココロモを参ませゆべし

「あら有難ありがたやゆさらば御暇申ゴロモゆゆん ワキ 「暫しばく扱つか々御身ゴロモゆいつくに住すむ人ひとぞ 女 「妾わがが栖すまゆ三輪サンリンの里サト山ヤマもと近ちかき所ところ也なり其上その上我庵わがアチゆ三輪

の山ヤマもと戀こしくゆとゆ詠よみたれ共何ともしに我わをば訪うひ給たまふべき猶なほも不審ふしんに思おもし召よさばとむらひ來きませ 上 杉立スギタテてる門カドをしるしにて

尋ね給たまへと云いひ捨すてかき消くす如ごとくに失うちにけり 上 「此草庵ココノアチを立ち出でて 三 行ゆけば程ほどなく三輪サンリンの里サト近ちかきあたりか山陰サンインの松マツゆしる

(六三八)

しもなかりけり杉村ばかり立つなる神垣の何所なるらん
 不思議やな是なる杉の二本を見れば有つる女人に與へつる衣の
 かかりたるぞや寄りて見れば衣の襟に金色の文字すゆれり讀て
 見れば歌也三の輪の清く清きぞ唐衣くると思ふな取と思ひし
 千早ぶる神も願のある故に人の知遇に逢ふぞ嬉しき
 やな是なる杉の木陰より妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや願ゆく
 の末世の衆生の願を叶へ御姿をまみえおかしませと念願深き感
 涙に墨の衣を濡らすぞや
 「耻し乍ら我姿上人にまみえ申すべ

後女上

正歌同

(七三八)

し罪を助けてたび給へ
 道の「衆生濟度の方便なるを」
 女姿と三輪の神
 帽子狩衣裳裾の上に掛け御影あらたに見え給ふ忝な御事や
 夫神代の昔物語の末代の衆生の爲濟度方便の事わざ品々以て世
 の爲なり
 暫し心の足曳の大和の國に年久しき夫婦の者あり八千代をこめ
 し玉椿變らぬ色を頼みけるに
 され共此人夜の來れ共晝見え

終り迄

終り迄

三

三

ず或夜の睦言に御身いかなる故によりかく年月を送る身の晝を
 ば何とうば玉の夜ならで通ひ給のぬいと不審多き事なり唯同
 じくゆとこしなへに契をこむべしとありしかば彼人答へいふや
 うげにも姿の耻しのもりて餘所にや知られなん今より後の通ふ
 まじ契も今宵計りなりとぬんころに語ればさすが別れの悲しき
 に歸る所を知らんとて苧環に針をつけ裳裾に是をとちつけて跡
 をひかへて慕ひ行く「また青柳の糸長く結ぶや早玉のおのが
 方にさゝがにの糸繰返し行く程に此山もとの神垣や杉の下枝に

止りたりこの抑淺ましましや契りし人の姿か其糸の三のけ残りしよ
 り三輪のしるしの過ぎし世を語るに付て耻しや「げに有難き
 御相好聞くにつけても法の道なほしも頼む心哉 「迎も神代の
 物語委しくいざや現し彼上人を慰めん 「先の岩戸の其始め隠
 れし神を出ださんとして八百萬の神遊是ぞ神樂の始なる 「ちの
 やぶる神樂 天の岩戸を引き立て 「神の跡なく入り給へば常闇
 の世と早なりぬ 「八百萬の神達岩戸の前にて是を歎き神樂を
 奏して舞ひ給へば「天照太神其時に岩戸を少し開き給へば又

三 輪

四

常闇の雲晴れて日月光り輝やけば人の面しるぐと見ゆる
 面白やと神の御聲の妙なる始めの物がたり打上思へば伊勢と三
 輪の神く一躰分身の御事今更何と岩倉や其關の戸の夜もあ
 け斯く有難き夢の告さむるや名残なるらん

安

宅

二月

シテ 武藏坊辨慶
ワキ 富樫の某

子方 判官藤経
ツレ 同行山伏

ワキ

「斯様にひ者か。加賀の國富樫の何某にてひ扱も頼朝義經御中不和
 にならせ給ふにより判官殿十二人の作山伏となつて奥へ御下向
 の由頼朝聞し召し及ばれ國々に新關を立て山伏を固く選み申せ
 との御事にてひさる間此所をば某承つて山伏を止め申ひ今日も
 固く申付けばやと存ひいかに誰かある」
 「御前にひ」
 「今日も
 山伏の御通りあらば此方へ申ひへ」
 「畏てひ」
 「旅の衣の篠懸
 の旅の衣の篠懸の露けき袖やしをるらん」
 「鴻門楯やぶれ都の」

安宅

狂言

狂言

ワキ

次第

山伏

旅の衣の篠懸

山伏

旅の衣の篠懸

山伏

旅の衣の篠懸

外の旅衣日もはるぐの越路の末思ひやるこそ遙なれ
「扱御
供の人々に
「伊勢の三郎駿河の次郎片岡まし尾常陸坊

「辨慶の先達の姿となりて
主従以上十二人未だ習のぬ旅姿袖

の篠懸露霜をけふ分けそめていつ迄の限もいさや白雪の越路の

春に急ぐなり
時しも頃の二月の
「知るも知ら

月の都を立出て是や此行くも歸るも別れてぬ
「浪路遙に行く舟

ぬも逢坂の山隠す霞を春の怨めしき
「海津の浦に着にけり東雲早く明け行けば浅茅色づく有

の

乳山
氣比の海宮居久しき神垣や松の木芽山猶行く先に見え
たるの
「御急ぎい程に是のけや安宅の湊に御着きにてい暫く此所に御休

みあらうするにてい
「いかに辨慶
「御前にい
「唯今旅人

の申て通りつる事を聞いてあるか
「いやなにとも承らずい

「安宅の湊に新關を立て山伏をかたく選むところを申つれ
「言語

道斷の御事にていもの哉扱の御下向を存て立てたる關と存い
是

ゆゑしき御大事にては先此傍にて暫く御談合あらうするにて
 は是の一大事の御事にては間皆々心中の通りを御意見御申あら
 うするにては ツレ山 「我等が心中に何程の事のゆへき唯打ち破て
 御通りあれかしと存ゆ シテ 「暫く仰の如く此關一所打ち破て御通
 りあらうするゆ易き事にてはへ共御出でゆんずる行末が御大
 事にては唯何共して無異の義が然るべからうするとぞんじゆ
 列 「兎も角も辨慶計ひゆへ シテ 「畏ては某きつと案じ出したる事のゆ
 我等を始めて皆々につくい山伏にてはが何と申ても御姿かくれ

御座なくは間此儘にては如何と存ゆ恐れ多き申事にてはへ共御
 篠懸をのけられあの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ御笠
 を深々と召されいかにも草臥たる御躰にて我等より後に引きさ
 がつて御通りゆゆ中々人の思ひもより申すまじきと存じゆ
 列 「げに是の尤にてはさらば篠懸を取ゆへ シテ 「畏てはいかに強力
 狂言 「御前にゆ シテ 「笈を持って來りゆへ 狂言 「畏ては シテ 「汝が笈を御肩に
 置かるゝ事のなんぼう冥加もなき事にてはなきか先汝の先へ行
 き關の様躰を見て眞に山伏を選むか又左様にもなきか懇に見て
 安 三

シテ

上ノ

注 意 義 經 一 巻 二 巻 三 巻 四 巻 五 巻 六 巻 七 巻 八 巻 九 巻 十 巻 十一 巻 十二 巻 十三 巻 十四 巻 十五 巻 十六 巻 十七 巻 十八 巻 十九 巻 二十 巻 二十一 巻 二十二 巻 二十三 巻 二十四 巻 二十五 巻 二十六 巻 二十七 巻 二十八 巻 二十九 巻 三十 巻 三十一 巻 三十二 巻 三十三 巻 三十四 巻 三十五 巻 三十六 巻 三十七 巻 三十八 巻 三十九 巻 四十 巻 四十一 巻 四十二 巻 四十三 巻 四十四 巻 四十五 巻 四十六 巻 四十七 巻 四十八 巻 四十九 巻 五十 巻 五十一 巻 五十二 巻 五十三 巻 五十四 巻 五十五 巻 五十六 巻 五十七 巻 五十八 巻 五十九 巻 六十 巻 六十一 巻 六十二 巻 六十三 巻 六十四 巻 六十五 巻 六十六 巻 六十七 巻 六十八 巻 六十九 巻 七十 巻 七十一 巻 七十二 巻 七十三 巻 七十四 巻 七十五 巻 七十六 巻 七十七 巻 七十八 巻 七十九 巻 八十 巻 八十一 巻 八十二 巻 八十三 巻 八十四 巻 八十五 巻 八十六 巻 八十七 巻 八十八 巻 八十九 巻 九十 巻 九十一 巻 九十二 巻 九十三 巻 九十四 巻 九十五 巻 九十六 巻 九十七 巻 九十八 巻 九十九 巻 百 巻

來りゆへ「さらば御立ちあらうするにては げにや紅の園生
 に植ても隠れなし」同山「強力にゆよも目を懸じと御篠懸を脱ぎ替
 て麻の衣を御身にまとひ」シテ「あの強力が負ひたる笈を」義經
 とつて肩にかけ 同山「笈の上には雨皮形箱とりつけて」綾菅笠
 にて顔を隠し 同山「金剛杖にすがりヨラ」足痛「足痛げなる強力にてよる
 くとして歩み給ふ御有様ぞ痛めしき」シテ「我等より後に引きさ
 がつて御出で有うするにてはさらば皆々御通ひへ」ツレ山「承りゆ
 いかにかに申ひ山伏達の大勢御通りゆ」ワキ「何と山伏の御通りあると

安 宅

四

申すか心得であるのうく客僧達是の關にては「承りゆ是の
 南都東大寺建立の爲に國々へ客僧をつかひされゆ北陸道をば此
 客僧承つて罷り通りゆ先勧めに御入ゆへ」ワキ「近頃殊勝にゆ勧め
 にゆ参らうするにてはさり乍ら是ゆ山伏達に限つてとめ申す關
 にては」シテ「扱其謂ゆゆ」ワキ「さんゆ頼朝義經御中不和にならせ給
 ふにより判官殿ゆ奥秀衡を頼み給ひ十二人の作山伏となつて御
 下向の由其聞えゆ間國々に新關を立て山伏を固く選み申せとの
 御事にてはさる間此所をば某承つて山伏をとめ申ゆ殊に是ゆ大

勢御座ひ間一人も通し申すまじくひ 委細承りひ夫の作山伏

をこそ止めよと仰出されひひつらめよも眞の山伏を止めよと仰

仰られひまじ 狂言 いやきのふも山伏を三人まで斬つゝる上仰

「扱其斬つたる山伏の判官殿か ワキ 「あらむつかしや問答の無益一

人も通し申すまじい上仰 シテ 「扱の我等をも是にて誅せられひ

かんずるな ワキ 「中々の事 ワキ 「言語道断かゝる不祥なる所へ來か

かつてひもの哉此上の方及ばぬ事さらば最期の勤を始めて尋常

に誅せられうずるにてひ皆々近う渡りひへ ツレ山 「承りひ シテ上 ツヨクいで

いで最期の勤を始ん夫山伏といつば役の優婆塞の行義を受け

「其身の不動明王の尊容をかたどり シテ 「兜巾といつば五智の寶冠

なり 同山 「十二因縁のひだをすゑて戴き シテ 「九會慢荼羅の柿のす

かけ 同山 「胎藏黑色のはききをけき シテ 「さて又八目の草蛙の

「八葉の蓮華を踏まへたり シテ 「出で入る息に阿吽の二字を稱へ

「即身即佛の山伏を 同山 「爰にて討とめ給ゆん事 同山 「明王の照覽計

り難う 同山 「熊野權現の御罰をあたらん事 同山 「立ち所に於いて

「疑ひあるべからず 同山 庵阿毘羅吽欠と數珠さらくと押揉ば

安 宅

五

「近頃殊勝にひ先に承ひひつるの南都東大寺の勸進と仰ひ間定て勸進帳の御座なき事ひまじ勸進帳を遊ばされひへ是にて聽聞

申さうずるにてひ シテ 「何と勸進帳をよめとひや ワキ 「中々の事

「心得申てひ元より勸進帳のあらばこそ笈の中より往來の巻物一

巻取出し勸進帳と名付つゝ高らかにこそ讀上げれ夫つらく

惟ん見れば大恩教主の秋の月の涅槃の雲に隠れ生死長夜の長き

夢驚かすべき人もなし爰に中頃帝おのします御名をば聖武皇帝

と名付奉り最愛の婦人に別れ戀慕やみ難く涕泣眼に荒く涙玉を

貫く思ひを善途にひるがへして廬舎那佛を建立す加程の靈場の

絶えなん事を悲みて俊乗坊重源諸國を勸進す一紙半錢の奉財の

輩の此世にての無比の樂にはこり當來にての數千蓮華の上に座

せん歸命稽首敬つて白すと天も響けと讀上げたり ワキ 「關の人々

肝を消し 同 恐をなして通しけり ワキ 「急いで御通りひへ

「承りひ 狂言 いかにかに申上ひ判官殿の御通りひ ワキ 「いかにかに是なる強

力とまれとこそ 山伏 「すの我君をあやしむるの一期の浮沈極りぬ

と皆一同に立歸る シテ 「あゝ暫くあゆて、事を仕損ずなやあ何と

てあの強力の通らぬぞ
 「あれの此方よりとめてい
 夫の何
 とて御とめいぞ
 「あの強力がちと人に似たると申す者のい程
 に扱とめていよ
 「何と人が人に似たると珍しからぬ仰にて
 い扱誰に似ていぞ
 「判官殿に似たると申す者のい程に落居の
 間留めてい
 「や言語道断判官殿に似申たる強力め一期の思
 ひてな腹立や日高くの能登の國迄指さうずると思ひつるに僅の
 笈負うて後にさがればこそ人も疑しむれ惣じて此程憎つくし憎
 くしと思ひつるにいで物見せてくれんとて金剛杖をおつとつて

さんぐくに打擲す通れとこそや笈に目を懸給ふの盗人さうな
 下山
 「かたぐの何故に」斯程いやしき強力に太刀刀抜給ふのめ
 だれ顔の振舞の臆病の至かと十一人の山伏の打刀ぬきかけて勇
 みかゝれる有様のいかなる天魔鬼神も恐れつべうぞ見えたる
 「近頃誤りてい早々御通りいへ
 「先の關をば早拔群に程隔たり
 てい間此所に暫御休あらうずるにてい皆々近う御参りいへいか
 に申上い扱も唯今の餘に難義にいひし程に不思議の働を仕い事
 是と申すに君の御運つきさせ給ふにより今辨慶が杖にもあたら

安宅

七

せ給ふと思へばいよく淺ましようこそいへ
「扱めあしくも心

得ぬと存ずいかに辨慶扱も唯今の氣轉更に凡慮よりなす業にあ

らず唯天の御加護とこそ思へ關の者共我をあやしめ生涯限りあ

りつる處に兎角の是非をばもんだゆずして唯眞の下人の如くさ

んぐに打つて我を扶くる是辨慶がはかりことに非す八幡の

御託宣かと思へば忝なくぞ覺ゆる 夫世の末世に及ぶと雖共

日月の未だ地に落給ゆず縦ひいかなる方便なり共正しき主君を

終り迄

打つ杖の天罰に當らぬ事やあるべき ぎにや現在の果を見て

過去未來を知と云ふ事 今に知られて身の上にくき年月のささ

らぎや下の十日のけふの難を遁れつるこそふしぎなれ 「唯さ

ながらに十餘人 夢の覺たる心ちして互に面を合せつ泣く計

りなる有様かな 然るに義經弓馬の家に生れきて命を賴朝に

奉り屍を西海の浪に沈め山野海岸に起きふしあかす武士の鎧の

袖枕かたしく隙も波の上或時の舟に浮み風波に身を任せ或時の

山脊の馬蹄も見えぬ雪の中に海少しある夕波の立ちくる音や須

磨明石の兎角三年の程もなく敵を亡ぼし靡く世の其忠勤もいた

安宅

つらになりはつる此身の抑何といへる因果ぞや（列官上）「げにや思ふ
 事叶のぬばこそ浮世なれと。知れ共さずが猶思ひかへせば梓弓
 の直なる人の苦しみて讒臣の彌増に世にありて遠遠東南の雲を
 起し西北の雪霜に責られ埋るうき身をことわり給ふべきなるに
 唯世にの神も佛もましまさぬかや恨めしの憂き世やあら恨めし
 の憂き世や（ワキ）「いかに誰かある。御前に（狂言）ひ。扱も山伏達に
 聊爾を申て餘りに面目もなくひ程に追つ付き申し酒を一つ参ら
 せうずるにてあるぞ。汝の先へ行きてとめ申ひへ（狂言）。畏てひいか

△一
 △二
 △三
 △四
 △五
 △六
 △七
 △八
 △九
 △十

に申ひ先にの聊爾を申て餘りに面目もなくひとて。關守の是迄酒
 を持たせて参られてひ（シテ）。「言語道斷の事聽て御目に懸らうずる
 にてひ（シテ）。げに。是も心得たり。人の情の盃にうけて心をとら
 んとや。是につきても猶々人に心なくれを吳織（ツヨク上）。あやしめらる
 な面々と辨慶に諫られて此山陰の一宿りにさらりと圓居して所
 も山路の菊の酒を飲まうよ（シテ）。「面白や山水に。盃を浮めて
 の流にひかる。曲水の手まつ遮る袖ふれていざや舞をまげうよ。
 本來辨慶の三塔の遊僧舞延年の時の和歌。是なる山水の落て巖に
 安宅（九）

響くこそ 鳴るの瀧の水 「たへ酔てひ程に先達御酌に参ら

うずるにてひ 「さらばたべひべしとてもの事に先達一さし御

舞ひひへ 鳴るの瀧の水 鳴るの瀧の水 日日照とも絶

えずとしたり 立てやたつか弓の心ゆるすな關守

の人々暇申てさらばよとて笈をおつとり肩にうちかけ虎の尾を

履み毒蛇の口を遁れたる心ちして陸奥の國へぞくだりける*

東

北

二月

前シテ 後シテ

和泉式部

年立ち返る春なれや 花の都に急がん 「是の東國方より

出でたる僧にてひ我未だ都を見ずひ程に此春思立ち都に上ひ

春立つや霞の關を今朝越えて 果のありけり武藏野を分け

暮らしつゝあと遠き山又山の雲を経て都の空も近づくや旅迄の

どけかるらん 急ぎひ程に是のはや都に着てひ又是な

る梅を見ひへば今を盛と見えてひ如何様名のなき事ひまじ此

あたりの人に尋ねばやと思ひひ 扱の此梅の和泉式部と申ひ

東 北

ぞや暫く眺めばやと思ひひ シテ女 「のうくあれなる御僧其梅を人

に御尋ひへば何と教へ参らせてひぞ ワキ 「さんひ人に尋ねてひへ

ば和泉式部とこそ教へひひつれ 女 「いや左様にひいふべからず

梅の名の好文木又の鶯宿梅など、こそ申すべけれ知らぬ人の申

せばとて用ぬ給ふべからず此寺未だ上東門院の御時和泉式部此

梅を植ゑ置き軒端の梅と名付けつゝ目かれせず詠め給ひしとな

り斯程に妙なる花の縁に御經をも讀誦し給ひば逆縁の御利益と

もなるべきなり是こそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にてひへ

「扱の和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にてひひけるぞや又あの方

丈の和泉式部の御休所にてひか 女 「中々の事^上和泉式部のふしど

なりしを作りもかへず其儘にて今に絶えせぬ眺ぞかし 上 「ふし

ぎや偕の古への名も残し置く形見とて シテ 「花も主を慕ふかと年

年色香もいやましに ワキ 「さもみやびたる御氣色 シテ 「猶も昔を

「思ふかと 上 「年月を古き軒端の梅の花 シテ 「主を^上知れば久堅の

天ぎる雪のなべて世に聞えたる名残かや和泉式部の花 シテ 「る

「げにや古へを聞くにつけても思ひ出の春や昔の春ならぬ我身ひ

(一六八) 上キ

東 北

更さらに思おもひ出でづれば我われ乍しばら懐なしく戀こしき涙なみだを遠とほ近ぢか人ひとにもうさんも
 恥はし暇ひま申まをさんさん「是こは迄までぞ花はなの根ねにま 今いまの是こは迄までぞ花はなの根ねに鳥とりの
 古ふる巢すだに歸かへるぞとて方丈ぼうじやうの燈火とうかを火宅くわたくとや猶なほ人ひとの見みん爰こゝこそ花はなの
 臺たいに和泉式部わいせんしきぶが臥床ふしどよとて方丈ぼうじやうの室むろに入いると見みえし夢ゆめの覺さめに
 けり見みし夢ゆめの覺さめて失うにけり

四番目

蟬

丸

八月

ワツシテ道

下丸

定さだなき世よの中なか々ににくくううき事ことや頼たのなるらん 是この延喜えんぎ第四よ
 の皇子みまろ蟬丸せみまるの宮みやにておゆしますげにや何事なにことも報はりける浮世うきよか
 な前世ぜんぜの戒行かいぎやういみじくて今皇子いまみまろとゆなり給たまへ共襦袢きんじゆばんの中なかよりな
 どやらん兩眼りやうがん盲めくらましくくて蒼天そうてんに月日げつじつの光ひかりなく闇夜やみよに燈火とうか暗くらう
 して五更ごげいの雨あめもやむ事ことなし 明あかし暮くれさせ給たまふ所に帝みかどいかな
 る叡慮えいりょやらんひそかに具足ぐそくし奉たてり逢坂山おうさかやまに捨すて置おき申まをし御髮みかみを
 おろし奉たてれとの論言ろんごん出でてかへらねば御痛みいたのしさの限かぎなけれ共勅ともちよく

上取

「誕なれば力なく 足弱ぐるま忍路を雲井のよそに廻らして
 東雲の空も名残の都路を 今日出でそめて又いつか歸らん
 事もかた糸の寄る邊なき身の行へさなきだに世の中の浮木の龜
 の年を経て盲龜の闇路たどり行く迷の雲も立登る逢坂山に着に
 けり」
 「いかに清貫 御前にい 扱我をば此山に捨

て置くべきか 一宣旨にては程に是迄の御供申ては共いづく
 に捨て置き申すべきやらんさるにても我君の堯舜より此方國を
 治め民を憐む御事なるに斯様の叡慮の何と申たる御事やらんか

「あら愚の清貫がいひ事やな本
 かり盲目の身と生る、事前世の戒行拙き故なりされば父帝も山

野に捨てさせ給ふ事御情なきに似たれ共此世にて過去の業障
 を果し後の世を助けんと御はかりこと是こそ眞の親の慈悲よ
 であら歎くまじの勅詔やな 一宣旨にては程に御髪を下し奉り

「是の何といひたる事ぞ 一是の御出家とて目出たき御事にて渡

らせ給ひし物若「げにやこうくわんもとぬをきりなかばだんに枕
 すと唐土のせいしが申けるも斯様の姿にて有けるぞや 一此御

(九六八) (后宮) (半断) (四座)

丸

二

有様にての中々盗人の恐もあるべければ御衣を賜つて箆といふ
ものを参らせ上げけり
是の雨による田箆の鳥と詠み置きつる

箆と云ふものか
又雨露の御爲なれば同じく笠を参らす

是の御侍御笠と申せと詠み置きつる笠といふ物よのう
又此

杖の御道しるべ御手に持たせ給ふべし
げにぐ是もつくか

らに千歳の坂をも越えなんと彼遍昭が詠し杖か
夫の千歳の

坂行く杖
爰の所も逢坂山の
關の戸さしの藁屋の竹の

杖柱とも頼みつる
父帝に
捨てられて
かゝる浮世

に逢坂の知るも知らぬも是見よや延喜の皇子の成り行く果ぞ悲
しき行人征馬の數々上り下りの旅衣袖をしほりて村雨のふり捨
て難き名残かな
さりとしていつを限りに有明の盡きぬ涙
を押へつはや歸るさになりぬれば皇子の後に唯獨り御身に添
ふものとして琵琶を抱て杖を持ち臥まるひてぞ泣給ふ

是の延喜第三の皇子逆髪との我事なり我皇子との生るれ共いつ

の因果の故やらん心より狂亂して邊土遠郷の狂人となつて

翠の髪空さまに生ひ上つて撫づれ共下らずいかにあれなる童

共の何を笑ふぞ何我髪の逆様なるがをかしいとやげに逆さまなる事のかかしいよな扱の我髪よりも汝等が身にて我を笑ふこそ逆様なれ面白し。是等の皆人間目前の境界なり。夫花の種の地に埋もつて千林の梢に上り月の影の天にかつて萬水の底に沈む。是等をば皆何れか順と見逆なりと云ゆん。我が皇子なれ共庶人に下り髪の上より生ひのぼつて星霜を戴く。是皆順逆の二つなり。面しろやカキ柳の髪をも風の梳るに。風にも解かれず。手にもわけられず。かなぐりすつるみての袂。拔頭の舞か。

甲の流し上階の花の都を立ち出て。憂き音になくか鴨川や。浅ましや。花の都を立ち出て。憂き音になくか鴨川や。末白河をうち渡り粟田口にも着しかば今の誰をか松坂や關のこなたと思ひしに後になるや音羽山の名残惜しの都や松虫鈴虫さりぐすの鳴くや夕陰の山科の里人もとがむなよ狂女なれど心の清瀧川と知るべし。逢坂の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒の歩みも近づくか水も走井の影見れば我乍ら浅ましや髪のおどろを戴き黛みも亂れ黒みてげに逆髪の影うつる水を鏡と夕波のうつな。の我姿や。第一第二の絃の索々として秋。

の風松を拂つて疎韻落つ第三第四の宮の我蟬丸が調めも四つの
 折からなりける村雨かなあらし心凄の夜すがらやな世の中兔に
 も角にも有りぬべし宮も藁屋も果しなれば「ふしぎやな是
 なる藁屋の内よりも撥音氣高き琵琶の音聞ゆ抑是程の賤が屋に
 もかゝる調めのありけるよと思ふにつけてなどやらん世に懐し
 き心ちして藁屋の雨の足音もせてひそかに立寄り聞き居たり
 「誰そや此藁屋のそとにも音するの此程折々とむらめつる博雅
 の三位にてましますか」「近づき聲をよくく聞けば弟の宮の

聲なりけりのう逆髪こそ参たれ蟬丸の内に入りますか「何逆
 髪との姉宮かと驚き藁屋の戸をあくれば「さも淺ましき御有
 さま」「互に手に手を取りかかし「弟の宮か」「姉宮かと
 共に御名を木綿付の鳥も音をなく逢坂のせきあへぬ御涙たがひ
 に袖やしほらん夫梅檀の双葉より香ばしといへりまして
 や一樹の宿として風たちばなの香をとめて花も連る枝とかや
 遠くの淨藏淨眼早離速離近く又應神天皇の皇子難波の皇子
 宇治の尊互に即位謙讓の御心ざし皆是連理の情とかや「去年

蟬丸

五

ら爰の兄弟の宿り共。思ひざりしに藁屋の内の一曲なくの斯く
ぞ共いかでしらめの四の緒に。一ひかれて爰に寄る邊の水の淺
からざりし契かな。世の末世に及ぶとても日月の地に落ちぬ。
習ひとこそ思ひしに我等いかなれば皇子を出てかく計り人臣に
だに交らで雲井の空をも迷ひ來て都鄙遠郷の狂人路頭山林の賤
となつて邊土旅人の憐みを頼む計りなりざるにても昨日迄の玉
樓金殿の床を磨きて玉衣の袖ひきかへてけふ又かゝる所の臥
床として竹の柱に竹の垣軒も扉も疎らなる藁屋の床に藁の窓敷物

とても藁葎是ぞ古への錦の蓐なるべし。一たまく事訪ふ物と
ての。嶺に木傳ふ猿の聲袖をうるほす村雨の音にたぐへて琵琶
の音を弾きならし弾きならし我音をもなく涙の雨だにも音せぬ
藁屋の軒のひまづくに時々月のみり乍ら目に見る事の叶ぬば。
月にもうとく雨をだに聞かぬ藁屋の起き臥しを思ひやられて痛
めしや。是迄なりやいつ迄も名残の更に盡きすまじ暇申して
蟬丸。二樹の蔭の宿りとして夫だにあるにましてげに兄弟の宮
の御別れとまるを思ひやり給へ。げに痛しや我乍ら行くの慰

一 方もあり留るをさこそと夕雲の立やすらひて泣居たり 一 鳴
 一 くや關路の夕鳥浮れ心ゆむば玉の 一 我黒髪のためかて行く
 一 別路とめよ逢坂の 一 關の杉村過ぎ行けば 一 人聲遠くなるま
 一 まに 一 藁屋の軒に 一 たゞずみて 一 互にさらばは常に訪
 一 せ給へとかすかに聲のする程聞き送りかへり見置きて泣く 一 測
 一 れおゆしますすく 一

一 是の唐土かね金山の麓揚子の里にかうふうと申す民にてゆ扱も
 一 我親に孝あるにより或夜不思議の夢を見る揚子の市に出て酒を
 一 賣るならば富貴の身となるべしと教の儘になす業の時去り時來
 一 りけるにや次第く富貴の身となりてゆ又爰にふしぎなる事
 一 のゆ市毎に來り酒を飲む者のゆが盃の數の重なれ共面色の更に
 一 變ずゆ程に餘に不審に存じ名を尋ねてゆへば海中に棲む猩々と
 一 かや申ゆ程に今日の潯陽の江に出て彼猩々を待たばやと存ゆ

上歌
八ノ入
海陽子
切遊

海陽の江のほとりにてく 菊をたへて夜もすがら月の前に
も友待つや又傾くるさかづきの影をたへて待居たり

地ノ上
下ノ上
打ノ上
小ノ上
リノ上
ヤノ上
エノ上

「老いせぬや」 薬の名をも菊の水盃も浮み出て友にあふぞ嬉
しき此友に逢ふぞうれしき 「御酒と聞く」 名もことわり

や秋風の 「吹けども」 「更に身に寒からじ」 「理り

や白菊の 「理りや白菊の着せ綿を温めて酒をいさや酌うよ」

「客人も御覽すらん」 「月星の隈もなき」 「所の海陽の」 「江の
内の酒盛」 「猩々舞を舞はうよ」 「蘆の葉の笛を吹き浪の鼓と

うと打ち 「聲澄み渡る浦風の」 「秋の調めや残るらん」 有

難や御身心すなほなるにより此壺に泉をたへえ唯今返し與ふる

なり 「よもつきし」 萬代迄の竹の葉の酒酌めども

つきず飲めども變らぬ秋の夜の盃影も傾く入江に枯たつ足もと

ゆよるくと酔ひに臥したる枕の夢のさむると思へば泉のその
儘盡させぬ宿こそめでたけれ

白

白

髭

三月

前ツレ道 夫 後ツテ 白髭明神

大目クニ君と神との道すぐに治まる國ぞ久しき抑々是の當今

に仕へ奉る臣下也扱も江州白髭の明神の靈神にて御座し君此程

不思議の御靈夢の御告ましますにより急ぎ參詣申せとの宣旨を

被り唯今白髭の明神に勅使に參詣仕りし九重の空も長閑け

き春の色霞む行へ花園の志賀の山越打過ぎて眞野の入

江の道すがら鳩の浦風さへかへり立寄る波も白髭の宮居に早く

着にけり釣の營みいつ迄か隙も波間に明け暮れん

二句「棹さしたる、海士小舟渡りかねたる浮世かな」
 「風歸帆を送る」
 萬里の程江天渺々として水光平かなり舟子の解く是明朝の雨面
 白や頃しも今の春の空霞の衣ほころびて峯白妙に咲く花の嵐も
 匂ふ日影かな
 賤しき海士の心まで春こそ長閑けかりけれ
 花誘ふ比良の山風吹きにけり
 漕ぎ行く舟の跡見ゆる鴉の
 浦わも遙々と霞渡りて天つ雁歸る越路の山迄も眺めに瀟々氣色
 かな
 「いかに是なる翁汝の此浦の者か」
 「さんび此浦
 の漁夫にてゆが朝なく沖に出て釣を垂れひ先御姿を見奉れば、

正歌
 花誘ふ
 比良山
 風吹き
 漕ぎ行
 舟の跡
 見ゆる
 鴉の浦
 わも遙
 々と霞
 渡りて
 天つ雁
 歸る越
 路の山
 迄も眺
 めに瀟
 々氣色
 かな

此あたりにての見馴れ申さぬ御事也。もし都よりの御参詣にて御
 座ゆか
 「げによく見てあるもの哉。是の當今に仕へ奉る臣下な
 るが君此程ふしぎの御靈夢の御告ましますにより、勅使に参詣申
 てゆ
 「有難や君としてだに斯程迄敬ひ給ふ御神の御威光の程
 こそ有難けれ賤しき海士の此身迄もすぐなる御代に近江の海の
 深き恵を頼むなり
 げに誰とても君を仰ぎ神を敬ふ心あらば、
 などが恵みにあづからざらん
 「殊更爰の
 「所から
 「瑞垣の
 年も經にけり白髭の
 神の誓ひ今とても變らざりけりげ

帯小
 歌

白
 髭

上歌同
 瑞垣

に有難や頼もしや我の心も波小舟釣の翁の身ながらも安く樂しむ此時に生れあふ身の有難や

夫此國のおこり家々に傳る所おのく別にして其説まぢくなりと雖も暫く歸する所の一義によらば天地既に分つて後第九の滅劫人壽二萬歳の時

「迦葉世尊西天に出世し給ふ時大聖釋尊其授記を得て都率天に住し給ひしが」我八相成道の後遺教流布の地何れの所にかあるべきとて此南瞻部州を普く飛行して御覽じけるに漫々とある大海の上に一切衆生悉有佛性如來常住無有變易の波の聲一葉の蘆

シテ下
佛子
釋尊
釋り迄

に凝り固まつて一つの島となる今の大宮權現の波止土濃なり

其後人壽百歳の時悉達と生れ給ひて八十年の春の頃頭北面西右脇臥拔提の波と消え給ふされ共佛の常住不滅法界の妙躰なれば昔蘆の葉の島となりし中つ國を御覽するに時の鷓草葺不合の尊の御代なれば佛法の名字を人知らず爰に比叡山の麓さゝ波や志賀の浦のほとりに釣を垂るゝ老翁あり釋尊彼に向つて翁もし此地の主たらば此山を我に與へよ佛法結界の地となすべしと宣へば翁答て申す様我人壽六千歳の始めより此山の主として此湖の

白
略

三

七度迄蘆原になりしをも正に見たりし翁也但し此地結界となる
 ならば釣する所失ぬべしと深く惜み申せば釋尊力なく今の寂光
 土に歸らんとし給へば「時に東方より淨瑠璃世界の主藥師忽
 然と出給ひてよきかなや釋尊此地に佛法を弘め給らん事よ我人
 壽二萬歳の昔より此所の主たれど老翁いまだ我を知らず何ぞ此
 山を惜み申すべきはや開闢し給へ我も此山の主と成て共に後五
 百歳の佛法を守るべしと固く誓約し給ひて二佛東西に去り給ふ
 其時の翁も今の白髭の神とかや「不思議なりとよ斯程迄妙な

る神秘を語る翁の其名の如何におぼつかない今何をか包む
 べき其古へも釣を垂れし翁なるが勅使を慰め申さんとて唯今爰
 に来りたり殊更今宵の天燈龍燈神前に來現の時節なれば暫く待
 たせ給ふべしと夕べの雲も立ち騒ぎ汀に落ち來る風
 の音老の波も寄り來る釣の翁と見えつるが我白髭の神をとて玉
 の扉を押開き社壇に入らせ給ひけり「八少女の返す袂
 の色々に宜禰が鼓も聲澄みて神さび渡れる折柄かな 上神の人
 の敬ふによつて威を増すましてや是の勅の使仰ても猶餘あり